

茨城県笠間市

# 塙谷遺跡

県営畑地帯総合整備事業に  
伴う発掘調査報告書

2008

笠間市教育委員会  
株式会社 地域文化財コンサルタント

茨城県笠間市

# 塙谷遺跡

県営畑地帯総合整備事業に  
伴う発掘調査報告書

2008

笠間市教育委員会  
株式会社 地域文化財コンサルタント



調査区全景（東から）



1号堅穴出土遺物

## 序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には愛宕山・難台山・館岸山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畠地帯総合整備事業に関わる発掘調査であります。この調査の結果、弥生・古墳時代の遺跡が確認され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 20 年 11 月

塙谷遺跡発掘調査会長

笠間市教育委員会教育長

飯 島 勇

## 例 言

- 本書は、茨城県笠間市小原字468外に所在する塙谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 本調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴い、記録保存を目的として実施されたものである。
- 現地調査から報告書刊行に至る業務は、塙谷遺跡発掘調査会より依頼を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが、同調査会と笠間市教育委員会の指導の下に実施した。
- 遺跡の所在地・調査面積・調査期間は下記の通りである。

調査期間 発掘調査：平成20年2月4日～3月1日 整理：平成20年9月1日～11月15日

調査面積 1,535 m<sup>2</sup>

- 本調査に関わる 塙谷遺跡発掘調査会組織は以下の通りである。

役職	氏名	職名
会長	瓶島勇	笠間市教育委員会教育長
副会長	寺内寛	笠間市文化財保護審議会副会長
#	小坂浩	笠間市教育委員会生涯学習課長
理事	小坂成勇	笠間市文化財保護審議会委員
#	深谷忠	#
#	深谷秀利	#
#	美浦忠男	#
監事	河原井規夫	生涯学習課国民文化振興推進室長
#	石井淳	生涯学習課文化振興グループ主任
#	木村健	生涯学習課文化振興グループ係長
#	小林聰	生涯学習課文化振興グループ主任
#	川松祐德	生涯学習課文化振興グループ主任
指導委員会委員長	川崎純徳	茨城県埋蔵文化財指導員
指導委員会副委員長	能島清光	笠間市文化財審議委員
調査司長(主任調査員)	高野浩之	地域文化財コンサルタント

- 現地調査担当者は以下の通りである。

試掘調査 能島清光(笠間市文化財審議委員) 本調査 高野浩之(地域文化財コンサルタント)

- 本書の作成にあたっては、野村浩史・増田香理・飯田貴代子・斎藤千佐乃・山崎幸子・柏千枝子・大越慶子・野口千代美の協力を得た。執筆分担は以下の通りである。

第I章～第1節 笠間市教育委員会 第I章～第2節・第II章～第V章 高野浩之

- 本調査で得られた資料(出土遺物・図面・写真等)は笠間市教育委員会が保管している。各資料の取り扱い方法については、末尾に記載してある。
- 本調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・諸機関よりご指導・ご協力を賜った。記してここに感謝を申し上げる。(順不同・敬称略)

能島清光 川崎純徳 海老澤稔 斎藤弘道 十生朗治 濱海老重建設 芦田和義

- 発掘調査参加者は以下の通りである。(順不同)

飯田昭 小坂部克己 吹野昇 豊島英則 青木誠 大山年明 三河博志  
備海桂 鈴木晃好 小田倉恵 高田幸江 飯田貴代子 斎藤千佐乃 山崎幸子

## 凡 例

- 本書で使用した地図は、国土地理院発行5万分の1地形図及び2万5千分の1地形図、笠間市発行2千5百分の1と同地図を5千分の1に加工したもの。試掘図は1千分の1である。
- 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次の通りである。  
SI…住居跡 SK…土坑 P…ピット SD…構 K…攪乱・木根等
- 実測図の縮尺は各図に記載してある。
- 土層と遺物の色調は『新版標準上色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。
- 遺構一覧表・遺物観察表の表記は( )内数値が現存値を、〔 〕内数値は推定値を表す。計測値単位はcm, gで示した。

## 目 次

### 序

例 言・凡 例

### 目 次

#### 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
-------------	---

第2節 調査経過	1
----------	---

#### 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	2
-----------	---

第2節 歴史的環境	3
-----------	---

#### 第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査	5
----------	---

第2節 調査の方法	6
-----------	---

第3節 基本堆積土層	6
------------	---

#### 第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	9
-----------	---

第2節 遺構	10
--------	----

第3節 出土遺物	23
----------	----

#### 第Ⅴ章 総 括

第1節 住居形態と規模の差異について	37
--------------------	----

第2節 塙谷遺跡の出土遺物について	38
-------------------	----

第3節 塙谷遺跡における集落の変遷について	39
-----------------------	----

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 調査地と周辺遺跡図A	2	第16図 9号住居実測図	18
第2図 調査地と周辺遺跡図B	3	第17図 10号住居実測図	19
第3図 調査地と遺跡位置図	4	第18図 1号堅穴実測図	20
第4図 試掘調査図	5	第19図 土坑実測図	21
第5図 基本堆積土層図	6	第20図 1号構造位置図	22
第6図 遺構全体図	7・8	第21図 1号溝実測図	23
第7図 調査区域図	9	第22図 1～2号住居出土上遺物実測図	24
第8図 1号住居実測図	10	第23図 2号住居出土遺物実測図	25
第9図 2号住居実測図	11	第24図 2～5号住居出土遺物実測図	26
第10図 3号住居実測図	12	第25図 5～9号住居出土遺物実測図	27
第11図 4号住居実測図	13	第26図 9～11号住居出土遺物実測図	28
第12図 5号住居実測図	14	第27図 1号堅穴出土遺物実測図	29
第13図 6号住居実測図	15	第28図 1号堅穴・1号土坑・遺構外遺物実測図	30
第14図 7号住居実測図	16	第29図 塙谷遺跡集落変遷図	36
第15図 8号住居実測図	17	第30図 住居形態・出土遺物の変遷概念図	41

## 表目次

第1表 土坑一覧表	22
第2表 出土遺物観察表（土器）	31
第3表 出土遺物観察表（土・石製品）	35
第4表 出土遺物観察表（石器）	35
第5表 山上遺物観察表（金属製品）	35

## 写真図版目次

写真図版 1 調査区全景（上・北）	写真図版 5 10号住居全景（南東から）
調査区全景（上・北）	10号住居炉近景（北西から）
1号竪穴全景（南東から）	1号竪穴全景（南東から）
1号住居遺物出土状況（東から）	1号竪穴遺物出土状況（南東から）
1号住居炉近景（南東から）	1号竪穴遺物出土状況（南西から）
1号住居炉断面（南西から）	1号竪穴遺物出土状況（西から）
2号住居全景（西から）	1・10号住居・1号竪穴全景（南東から）
2号住居遺物出土状況（南から）	1号溝全景（南から）
2号住居遺物出土状況（南から）	写真図版 6 1号上坑全景（南から）
2号住居炉近景（西から）	1号土坑上層断面（南から）
3号住居全景（南東から）	2・5・6号土坑全景（南東から）
3号住居炉近景（南西から）	3号土坑全景（南東から）
4号住居全景（南東から）	3号土坑上層断面（南東から）
4号住居炉近景（北東から）	6・7・8号土坑全景（南東から）
5号住居全景（南西から）	10・11号土坑全景（西から）
5号住居遺物出土状況（東から）	12・13号上坑全景（東から）
5号住居遺物出土状況（東から）	写真図版 7 1・2号住居・遺構外遺物
5号住居炉近景（南西から）	写真図版 8 2～4号住居遺物
6号住居全景・遺物出土状況（南東から）	
6号住居 Pit-4断面（南西から）	写真図版 9 5～9号住居遺物
7号住居全景（南東から）	
7号住居炉全景（北東から）	写真図版 10 10号住居・1号竪穴・1号土坑遺物
8号住居炉近景（南東から）	
9号住居遺物出土状況（南東から）	
9号住居遺物出土状況（南西から）	
9号住居炉近景（北東から）	

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

畠地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、収穫の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、旧友部町時代の平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、県の指導の下、効率的な耕作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年1月に三本松遺跡の発掘調査、翌年1月に小原遺跡の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は塙谷遺跡の範囲内であることから、友部町教育委員会（現笠間市教育委員会）は平成17年12月に笠間市文化財審議委員の能島清光氏に試掘確認の調査を依頼した。その結果トレンチから2軒の住居跡が確認され、出土遺物などから弥生時代から古墳時代の集落があることが推定された。

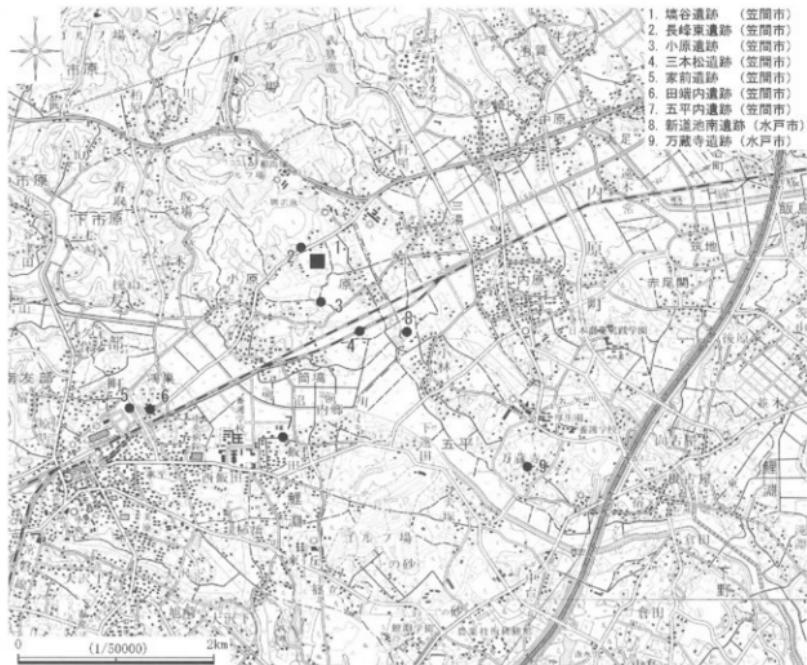
工事主体者である水戸土地改良事務所は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成19年7月10日付けで塙谷遺跡について文化財保護法94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成19年11月2日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は生涯学習課内に「塙谷遺跡発掘調査会」を設立し、平成20年1月23日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届け出を茨城県教育委員会へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏と笠間市文化財保護審議委員の能島清光氏を指導委員として平成20年2月4日より発掘調査を実施することとなった。

### 第2節 調査経過

2月4日に調査を開始する。1日から6日にかけて表土除去を行った。7日より作業員を投入し、テント等休憩施設を設置した後、遺構確認作業を開始した。確認の段階では住居跡が9軒以上所在するものと判断された。8日より遺構の掘り下げを開始する。掘り下げは3～5号住居より行い、それぞれの住居にかかる木根の除去と並行して、順次住居の掘り下げを優先して調査を進めた。13日、前日までの調査に加え2号住居の掘り下げを開始する。この日調査会の視察を受けている。14日、3号住居の床面精査と炉の掘り下げを行い、調査を完了している。15日、4・5号住居の床面と壁の精査、併せて1号土坑及び1号構の掘り下げを開始する。17日までには4・5号住居のピット・炉の掘り下げを完了し、次いで18日には9・10号住居の掘り下げを開始する。2号住居では多量に出土した遺物の取り上げ作業を行い、床面精査の作業へ移行する。20日、6号住居の掘り下げと7・8号住居の精査。22日になり1号住居、1号竪穴の掘り下げを開始する。26日には2～10号住居の調査を完了している。27日、1号住居・1号竪穴の掘り下げを継続し、並行して掘り下げの残る10～14号土坑の掘り下げを行った。28日、1号住居の炉の調査をもって、調査区における全ての遺構調査を完了する。29日、午前中、全体精査を行った後ラジコンヘリコプターによる空撮を行う。午後、教育委員会の終了確認を受ける。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境



第1図 潟沼前川流域の主な弥生時代包蔵地(1)

### 第1節 地理的環境

塙谷遺跡は、旧笠間市、旧岩間町、旧友部町の3市町が合併した笠間市に所在し、旧友部町の北東端部にあたる小原地区に位置している。

笠間市は、茨城県のほぼ中央にあたり、西に桜川市、東に水戸市、北は城里町と一部棚倉郡境、南は石岡市と小美玉市の一部にそれぞれ接している。笠間市の地形は、市域北部から西部にかけての旧笠間市側は八溝山系鶴足山塊の山岳丘陵地が主となり、東部から南部にかけては旧友部町の標高30～40 mの東茨城台地と呼ばれる台地が主となって、茨城町から大洗町まで広がっている。この地形に導かれるように、旧七会村山地付近に源流を持った澗沼川が、旧笠間市の中央から旧岩間町・旧友部町の境を貫け、澗沼へと注いでいる。また、市域西部では飯田川や片庭川、稲田川、市域東部では澗沼前川や枝折川に合流する中小河川が澗沼川に合流し、それぞれの流域で低地が形成されている。

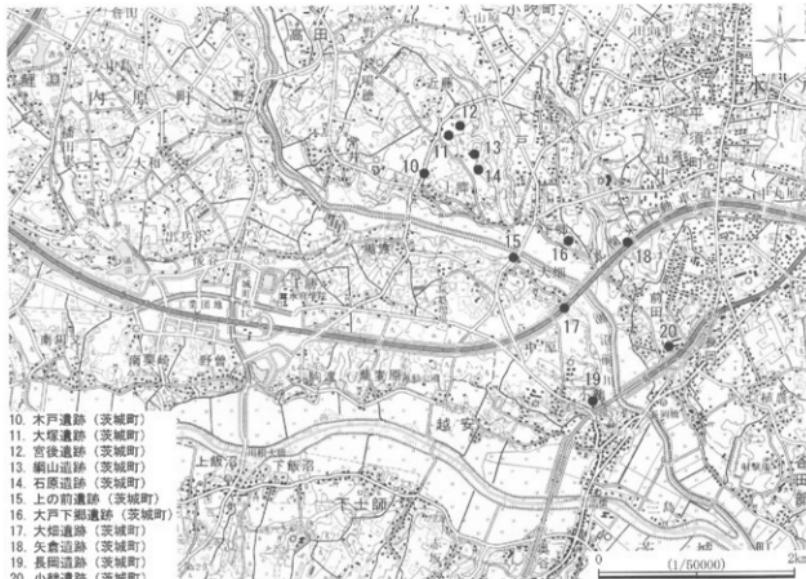
塙谷遺跡は澗沼前川流域の小原地区にあり、傾斜90%が3%未満の緩やかな丘陵地で、周辺は水戸市の旧内原町に続く平地林の日立つ場所となっている。今回の調査区は、澗沼前川の左岸に位置しておらず、本河川低地から派生する閑谷谷が多く入り込んだ小支谷沿いにあり、標高39～41 mの丘陵地最先端部に立地している。谷津を挟んで周辺対岸には同様の丘陵地を一望することができる。

## 第2節 歴史的環境

笠間市では、旧3市町の周知の遺跡総数が434箇所と膨大な数にのぼる。その中にあって今回の調査で主体となった弥生時代後期の集落について、潤沼前川流域の遺跡を市域外も含めて概観する。

潤沼前川は、旧友部町の北部、上市原の山内山周辺を水源とし、中市原・下市原や小原の水田地帯を東流している。市域の弥生時代散布地については『友部町史』によると、潤沼前川の源流に近い上市原で弥生の散布が認められるのを始め、8箇所の散布地が周知されており、今回調査が行われた塙谷遺跡周辺の小原地区もその中に含まれている。その後、潤沼前川右岸の久保塚遺跡では、はじめて住居跡の調査が行われている。近年になって、小原地区的丘陵地では数次に亘る調査が行われ、発達した小支谷縁辺における弥生時代から古代にかけての痕跡が明らかになっている。小原遺跡や三本松遺跡の調査においては、弥生時代後期の住居跡を伴った集落が確認されており、塙谷遺跡に西側に隣接する遺跡からも同様の成果が期待される。小原地区に加えて、喜塚古墳周辺や原坪遺跡など周辺に散布地が点在するところを見ると、この区域の大規模な弥生集落の広がりが示唆されるところである。

潤沼前川を下って笠間市域外に目を転じてみると、本河川は小原地区から水戸市の南西端（旧内原町域）を抜けで茨城町北部をさらに東流し、潤沼川に合流して潤沼へと至る。旧内原町内では潤沼前川流域での本格的な調査は実施されていないものの、五平周辺の万歳寺遺跡をはじめ、難波周辺の遺跡でも弥生土器の散布が確認されている。さらに下って、小原地区から東方約8~9km地点には茨城町の大戸遺跡群が所在する。大戸遺跡群は、段丘の右岸に大畑遺跡、左岸に矢倉遺跡、大塚遺跡、石原遺跡、宮後遺跡、大戸下郷遺跡等の県内でも代表的な遺跡によって形成された遺跡群であり、特に、矢倉・大畑・大戸下郷遺跡の調査では弥生時代後期の集落として良好な資料が得られており、それぞれが若干の時期差を有して営まれた状況が報告されている。大戸遺跡群からさらに下ると、標識となつた「長岡式土器」を持つ長岡遺跡が所在し、小鶴遺跡でも弥生住居跡の調査が行われている。これらのことから、弥生時代後期の解明にとって、潤沼前川流域は重要な区域となっていることが理解される。



第2図 潤沼前川流域の主な弥生時代包蔵地(2)



第3図 調査地と道路位置図

### 第Ⅲ章 調査の概要

## 第1節 試掘調査

今回の事業に際し、事前の試掘調査が笠間市文化財審議委員・能島清光氏によって、3期にわたり行われている。確認調査報告書によると、今回の調査区は切上C地区にあたり、植樹等の制約を受けた中にあって、樹木間の若干広めになっている部分にトレンチ1本が入れられている（第4図参照）。

調査の結果、住居跡2軒の落ち込みが検出されたが、保存状況は不明とされている。出土遺物は事前の分布調査で発生十数片が採取されているものの、調査時には出土していない。

この試験調査で確認された住居跡は、今回の本調査で5号住居と6号住居の重複であることが判明している。



第4図 試掘調査図 (C 地区)

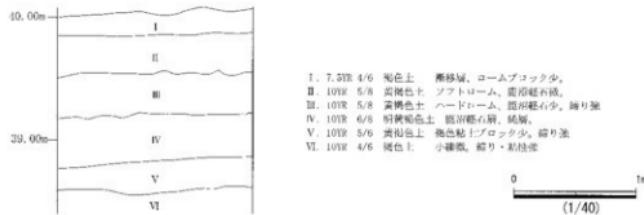
## 第2節 調査の方法

調査は、試掘調査の結果に基づき設定された 1,535 m<sup>2</sup>を発掘調査対象範囲として実施した。実施にあたっては、笠間市埋蔵文化財発掘調査業務共通仕様書に則って行っている。

表土除去は重機を使用し、遺構確認面まで掘り下げ、その後、遺構確認から遺構の掘り下げについては人力で行った。基準点は、公共座標第IX系を使用し、X = 40920, Y = 44770 の交点を基準としたグリッドを設定した。グリッドは北西角を基準とした 10 m のグリッドを調査区内に網羅し、西から東にかけてアルファベット A ~ F、北から南にかけて算用数字 1 ~ 5 を当てはめて、A1, A2, A3, ..., といった呼称を各グリッドに与えている。記録について、実測は、平面図・断面図とともに 1/20 縮尺を基本とし、構等の範囲が大きいものに関しては 1/40 縮尺を適用し、全体図は 1/200 縮尺で作成している。出土遺物は破片を点上げで行っているが、形状を留めている遺物については微細図を作成している。写真是、35 mm 白黒及びカラーリバーサルによって調査の過程で各遺構を撮影し、予備としてデジタルカメラを用いた。空撮はラジコンヘリコプターを使用している。実測及び写真撮影等の記録作業は調査の過程で隨時実施した。

## 第3節 基本堆積上層

基本堆積上層は、調査区のほぼ中央、やや斜面に位置する地点の D3 グリッド内に 2m × 2m の試掘坑を設定した。調査区全体の表土層は耕作土で層厚が 10 ~ 20 cm 程となり、標高の高い部分ほど表土層厚は薄く、斜面部に移行するほど厚さを増すようである。表土層直下が I 層ソフトローム上面で遺構確認面となり、一部漸移層が若干認められる部分もある。II 層から III 層はハードロームとなり、64 ~ 68 cm の層厚で堆積し、鹿沼輕石純層に達する。鹿沼土は 36 ~ 40 cm の層厚で良好な状態である。IV 層以下のローム層から締りと粘性が強さを増し、V 層では小穂が含まれるようになる。



第5図 基本土層図

## 【参考文献】（第II、III章）

茨城県 『茨城県資料 考古資料編 弥生時代』 1991 年

川又清明 『鹿沼前川流域における弥生時代後期の遺跡の分布状況』『研究ノート 9 号』 1999 年

峰須紀夫 『茨城県 地学ガイド』 1986 年



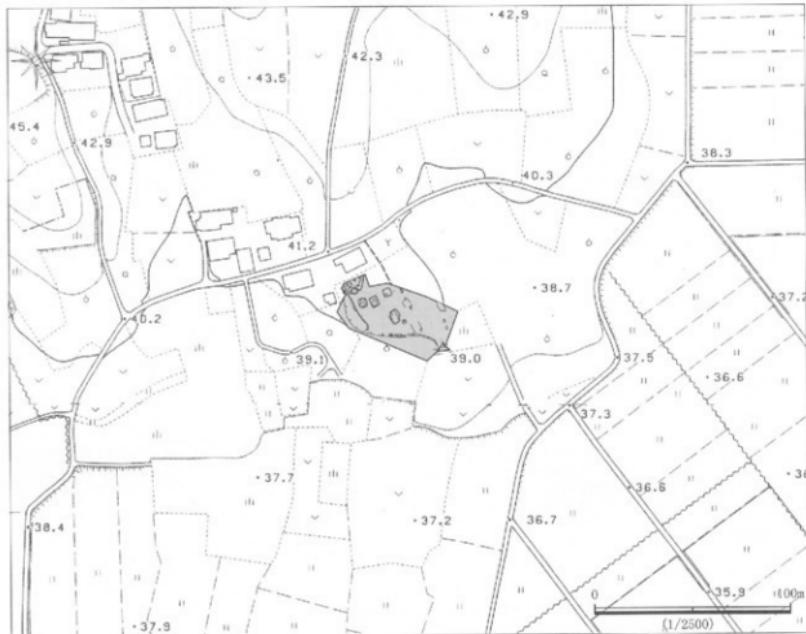
## 第IV章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の陥し穴1基、弥生時代の住居跡10軒、堅穴状遺構1基、時期不明の土坑13基、溝1条であった。

各遺構は、調査区の中央から西側の立地が最も高い位置に集中して確認されている。南側の段差下は耕作による擾乱が著しく、遺構の確認には至らなかった。現況を見ると、段差下の部分に関しては平坦な地形を呈しているものの、耕作が免れているところではハードローム面が認められることから、以前は段差のない緩傾斜地であったと推測される。また東側の緩斜面地は、南北に伸びる直線的な深い落ち込みが調査区を分断しており、この落ち込みについては、遺構確認当初は溝跡を想定していたが、輪状の凹凸に加え硬化した部分が確認された事から、道であった可能性が高く、これを境に東側は大部分が削平を受けた状況となっていた。幸うじて掘り込みの深い部分だけが遺存するのみであった。この地点で確認された住居は覆土が飛ばされて、炉や柱穴のみが確認されている南東側の一部で敵状の掘り込みが確認されているが、近現代の陶磁器片が出土していることから、新しい時期の耕作跡と判断され、先述した道路はこの耕作跡と軸が一致する事から一連の掘り込みと考えられる。

今回は、丘陵台地の先端部のみの調査となつたが、北側の台地基部や、浅い谷を挟んだ隣接する丘陵地でも集落の存在が試験調査によって確認されている。その結果、大規模な集落の存在は明らかであり、本調査区においては、集落のはんの一部であることが理解される。さらに南方に対応する丘陵地では、弥生時代住居跡の調査事例が17軒ほどあり、今回の調査を含め、今後の調査を重ねることが小原地区一帯での集落の展開を考察する上で重要なものと考える。



第7図 調査区域図

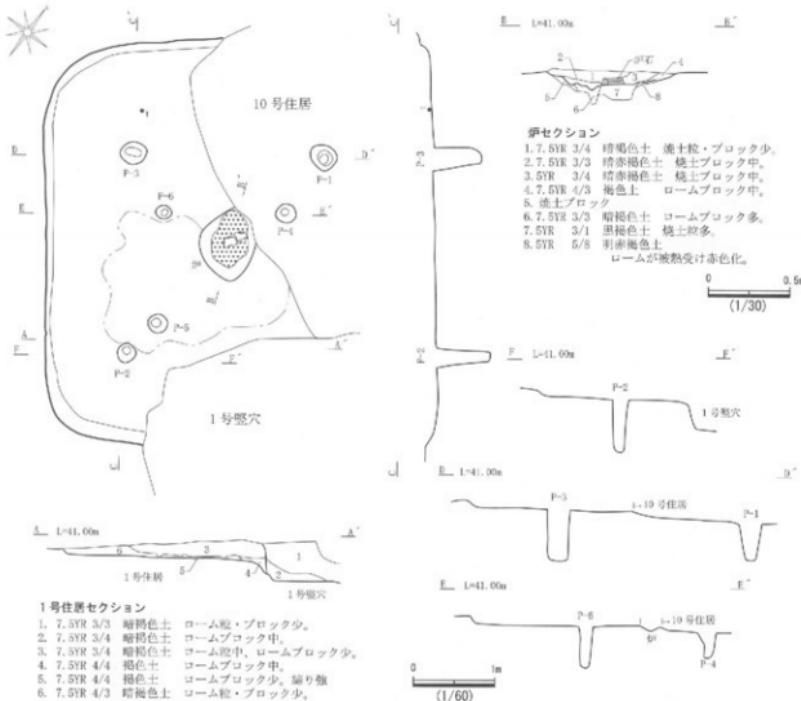
## 第2節 遺構

### (1) 住居跡

#### 1号住居 (SI-01: 図版第8図・写真図版2)

本跡は、調査区北西端のA1・A2グリッドに位置する。北東側では10号住居に、南東側では1号竪穴と重複し、何れの遺構よりも本跡が古い。残存率は約60%で、住居の形状は概ね隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は、長軸4.94m、短軸は現状確認される範囲で3.30m、壁高は8~11cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向は南西壁線より求め、N-39°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、住居南西側部分では硬化が顕著である。炉跡は住居内のほぼ中央で確認され、形状は楕円形を呈する。規模は長径0.90m、短径0.68m、深さ15cmの掘り込みに、焼土面がほぼ底面に広がっている。焼土中央部には炉石が確認されている。主柱穴はP1~P3が相当し、P1は、10号住居の床面下より確認されたが、南東側では確認することができなかった。この主柱穴を結ぶ対角線上の内側で、主柱穴より規模の小さいピットP4~P6が確認され、拡張が施される以前の柱穴と捉えられる。この小ピットは、主柱穴同様に南東側では確認されなかった。

遺物は、弥生後期の壺形土器が主体で出土している。遺物の総点数は155点でほとんどが壺形土器の破片である。出土状況は、東側が消滅しているため全体を網羅する事はできないが、P-3の北側に形状を留めた壺形土器が出土している。

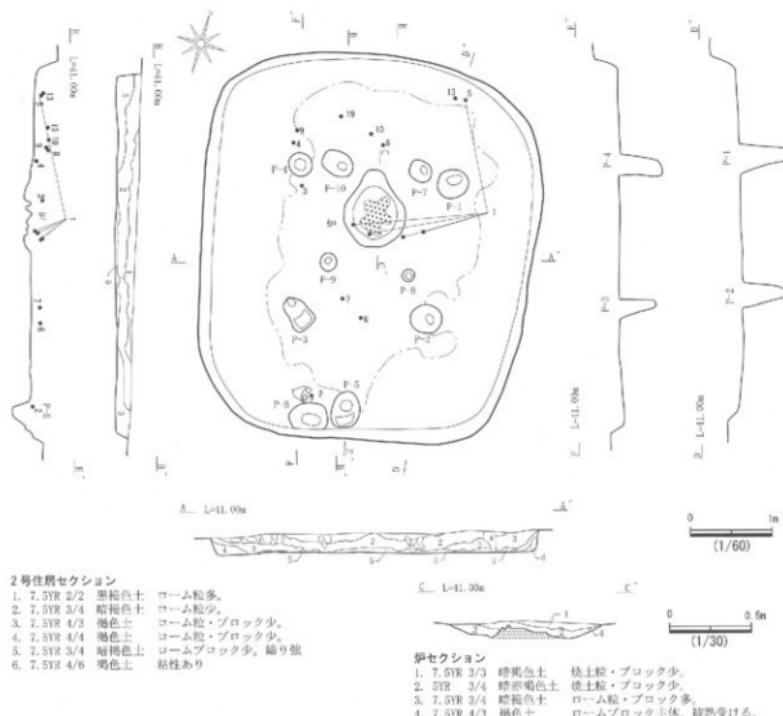


第8図 1号住居実測図

## 2号住居 (SI-02: 図版第9図・写真図版2)

本跡は、調査区西側のB2グリッドに位置する。住居の形状は隅丸長方形であるが、各コーナー部分ではやや丸みが強くなっている。規模は、長軸4.75m、短軸4.11m、壁高は23~25cmを測り、ほぼ直立して立ち上がる。主軸方向はN-9°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、出入り口から炉周辺にかけて良好踏み締まっている。炉跡は住居内の中央よりやや北側に寄って確認され、形状は楕円形を呈する。規模は長径0.95m、短径0.76m、深さ13cmの掘り込みに、焼土面が底面のほぼ中央に広がっている。支柱穴はP1~P4が相当し、これら支柱穴の内側で規模の小さいピットP7~P10が併むように確認されている。P8の上面で硬化面が被っていた事から、拡張が施される以前の柱穴と判断される。P5は出入り口に伴うピットと考えられる。P5の西側には隣接して楕円形の浅いP6が確認され、貯蔵穴ではないかと思われる。

遺物は、弥生後期の壺形土器の破片が主体で出土している。遺物の出土点数は383点で、ほとんどが壺形土器の破片であるが、今回調査された住居の中では最も出土量が多い。出土状況は、住居内の覆土中から全域で出土しており、特に炉周辺とガラス南側P-2~P-3間からやまとまって出土する傾向にある。

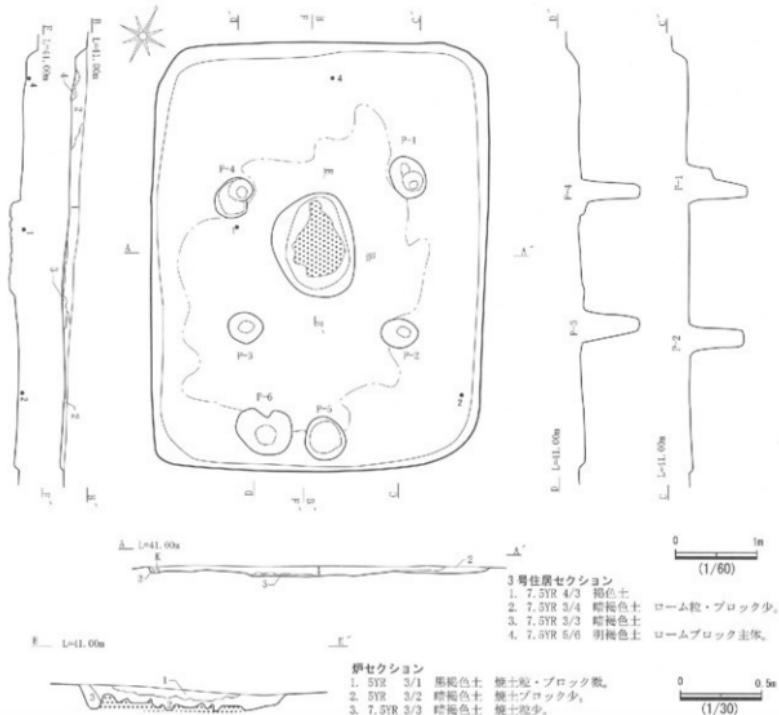


第9図 2号住居実測図

### 3号住居 (SI-03: 図版第10図・写真図版3)

本跡は、調査区西側のB2・C2グリッドに位置する。形状は講丸長方形で、各コーナー部分の丸みが強い。住居の規模は、長軸5.28m、短軸は4.15m、壁高は6~16cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向はN=27°→Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、出入り口から周辺にかけて良く踏み締まっているが、戸の周辺域では壁付近より若干窪んでいる。炉跡は住居内の中央よりやや北側に寄って確認され、形状は梢円形を呈する。規模は長径1.27m、短径0.98m、深さ18cmとやや大型の掘り込みに、焼土面が底面のほぼ全体に広がっている。主柱穴はP1~P4が相当し、住居北側のP1とP4は、上面がやや広がっている。P5は出入り口に伴うビットと考えられ、P5の西側には隣接して不整形な浅いP6が確認されており、貯蔵穴ではないかと思われる。

遺物は、弥生後期壺形土器の破片が主体で出土している。出土総点数は101点。ほとんどが壺形土器の破片で、その内約60%が注記も不可能な極細片の遺物となっている。出土状況は、P4と炉北側からの出土する傾向が認められる。

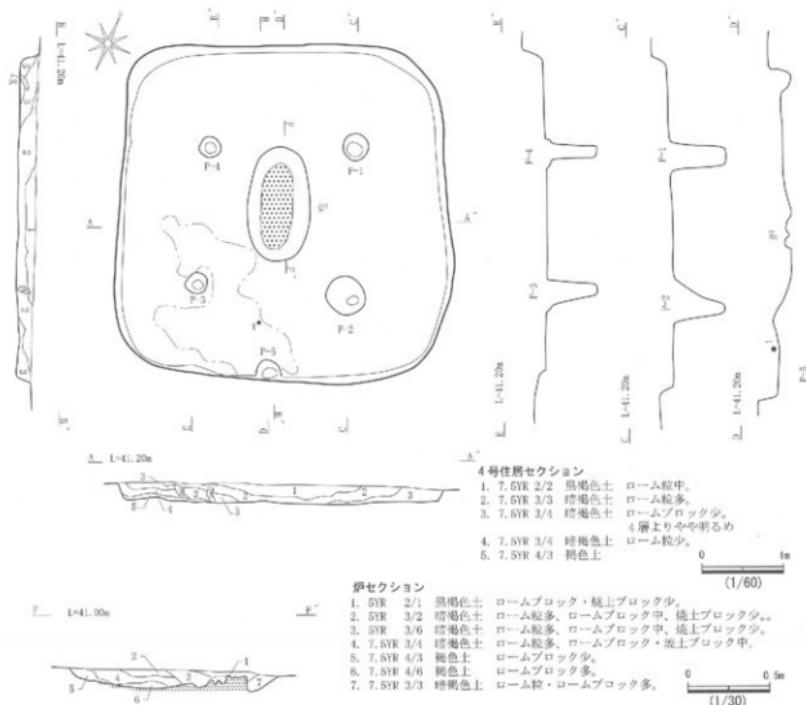


第10図 3号住居実測図

#### 4号住居 (SI-04: 図版第11図・写真図版3)

本跡は、調査区中央北寄りのC1・C2グリッドに位置する。住居の形状は隅丸方形で、各コーナー部分の丸みが強い。規模は、長軸4.20m、短軸4.18m、壁高は19~21cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向はN-27°-Eを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、出入り口からP3付近が良好踏み締まっている。炉跡は住居内のはば中央で確認され、形状は長楕円形を呈する。規模は長径1.40m、短径0.76m、深さ23cmと住居の規模に対して大きい数値となる。火焼部は底面の炉の南側に認められ、土層や焼土の堆積状況から2期に分かれて使用された可能性が考えられる。また炉北側の縁では床面が若干降起する状態が認められた。主柱穴はP1~P4が相当し、住居の対角線上に配されている。P5は出入り口に伴うピットと考えられ、南西壁に接している。貯藏穴らしきピットは確認されていない。

遺物は、弥生後期・壺形土器の破片が主体で出土している。出土総点数は106点でほとんどが細片である。出土状況は、主柱穴内側から出土する傾向にある。

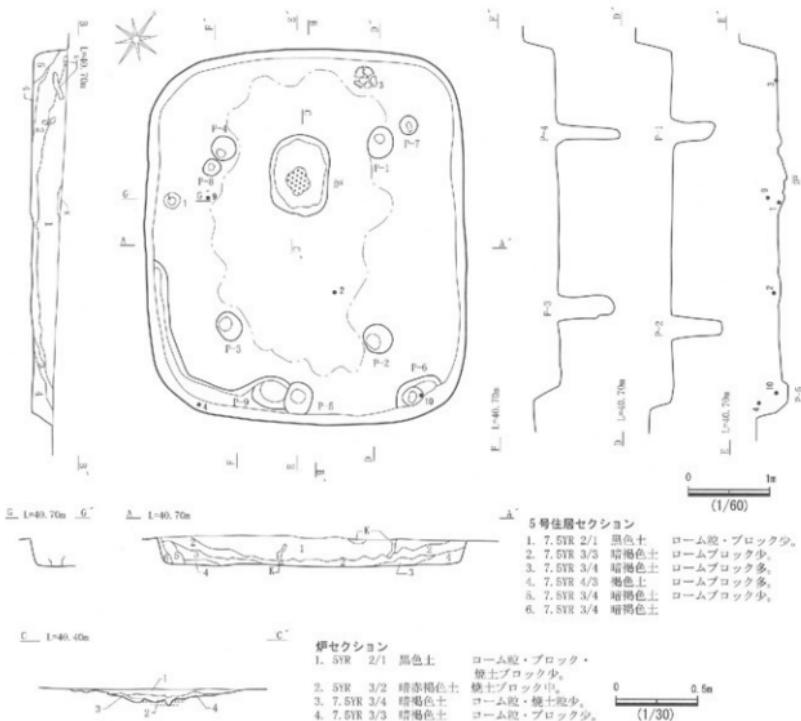


第11図 4号住居実測図

### 5号住居 (SI-05: 図版第12図・写真図版3)

本跡は、調査区中央部のC2・C3・D2・D3グリッドにまたがって位置する。南西側では6号住居と重複し、本跡が新しい。住居の形状は隅丸長方形を呈し、各コーナーの丸みが強い。規模は、長軸4.60m、短軸3.95m、壁高は26~43cmを測り、ほぼ直立して立ち上がる。主軸方向はN-34°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、住居中央部でよく踏み締められている。炉跡は住居内の中央や北寄りのP1・P4間に近い位置で確認され、形状は楕円形を呈する。規模は長径1.00m、短径0.73m、深さ15cmの掘り込みに、焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴はP1~P4が相当し、住居の対角線上に配されている。主柱穴より規模の小さいピットP7はP1の付近で、P8はP4の付近で確認されているが規則性や主柱穴との関連性は見出せず、性格は不明である。P5は南壁に接しており、出入り口施設に伴うピットと思われる。P5に接して確認されたP9は、掘り込みの浅い楕円形を呈したピットで貯藏穴の可能性が考えられる。住居南壁際では堀溝と思われる落ち込みが確認されており、規模は幅0.09~0.17m、床面からの深さは2~4cmとなっている。

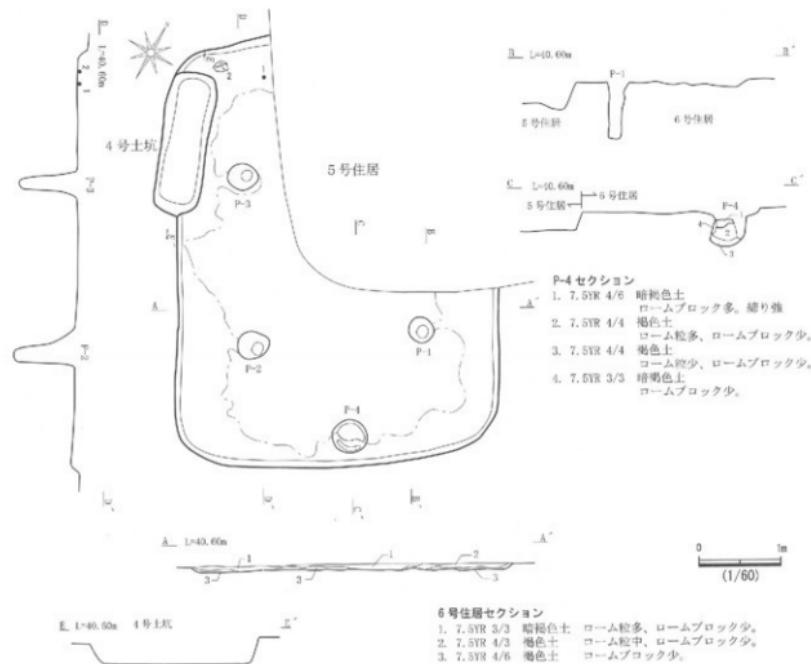
遺物は、弥生後期壺形土器の破片が主体で出土している。出土遺物の総点数は103点で、覆土の遺存が深い割に出土量は少ない。出土状況は壁際に点在する傾向にある。1は口縁部が正位の状態で出土し、2は北隅付近に押し潰された形で出土している。



#### 6号住居 (SI-06 : 図版第13図・写真図版4)

本跡は、調査区中央部のC3・D3グリッドに位置する。北東側では5号住居と、北西側では4号土坑と重複し、何れの遺構よりも本跡が古い。住居の形状は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸 5.25 m、短軸 3.96 m、壁高は7~9 cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向はN - 30° - Wを指す。覆土は浅く、壁寄りの堆積状況からレンズ状に堆積した自然堆積層を呈しているものと思われる。床面は直床で、住居内のほぼ全域で踏み締められている。炉跡は5号住居跡の構築時に消失していると考えられ、確認はできなかった。主柱穴はP1~P3が相当し、もう1本の主柱穴は5号住居内の床下より検索を試みたが確認はできなかった。P4は南壁に寄っており、出入り口施設に伴うピットと思われる。

遺物は、弥生後期の煮が主体で出土している。出土遺物の総点数は20点で、住居の3分の2程が消失しているため言及できないが、調査区内の住居では遺物の出土量が最も少ない。住居北ヨーナー部分に形状を留めた遺物が出土している。

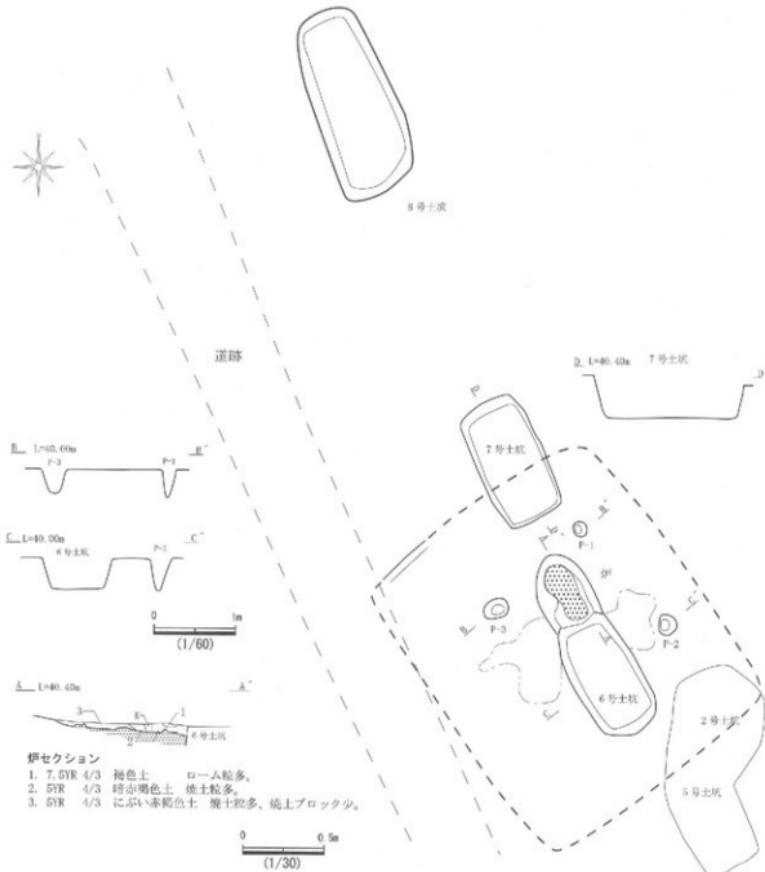


第13図 6号住居実測図

7号住居 (SI-07 : 図版第14図・写真図版4)

本跡は、調査区の東側、C3・D3 グリッドに位置する。本跡は、削平が著しいため壁が遺存せず、柱穴、床面を確認するのみとなった。住居のほぼ中央と思われる部分を 6・7 号土坑が縦列しており、何れの構造よりも本跡が古い。形状及び住居の規模、覆土は確認不能である。主軸方向は柱の長軸が住居の主軸に即していると考え、N = 30° - W を指すものと思われる。床面は直床で、柱から柱穴と思われる間に踏み締められた跡を確認している。炉跡は形状が橢円形を呈し、規模は南東側が 6 号土坑に切られているため、長径は現状確認される範囲で 0.93 m、短径は 0.68 m、深さ 10 cm の掘り込みに、焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴は P1 ~ P3 が相当するものと思われる。もう 1 本の主柱穴や出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。

遺物は、壺形土器の副部破片が主体で出土しており、出土遺物の総点数は 16 点で、全て柱からの出土である。重複する土坑内から現代の遺物に混じて弥生土器の破片が出土しているものの、住居に伴う遺物かどうかは不明である。

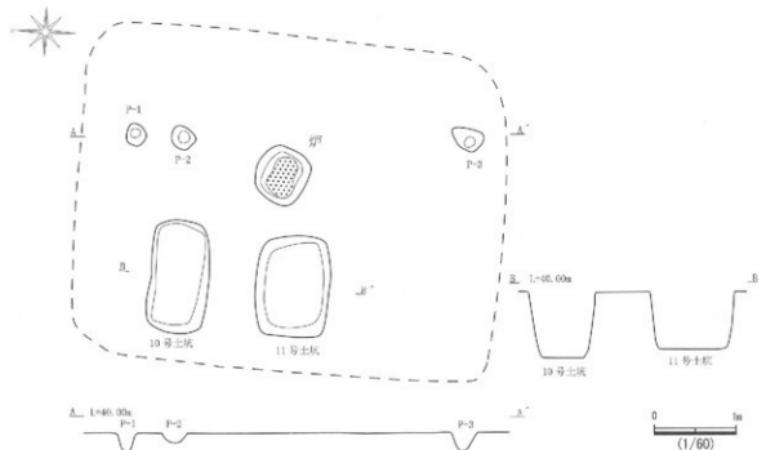


第14図 7号住居・7,8土坑実測図

### 8号住居 (SL-08: 図版第15図・写真図版4)

本跡は、調査区中央部のやや北東寄り、D3-E3-E4グリッドに位置する。本跡は、削平が著しいため壁が遺存せず、炉と柱穴らしきピットを確認するのみとなった。炉の西側に隣接して10・11号土坑が所在しており、覆土などから何れの遺構よりも本跡が古いと判断される。住居の形状及び規模、覆土、床面の状態は確認不能である。主軸方向は炉と柱穴の配置状況から判断して、N-30°-W前後を指すものと思われる。炉跡は形状が梢円形を呈し、規模は南東側が6号土坑に切られているため、長径は現状確認される範囲で0.68m、短径は0.63m、深さ6cmの掘り込みに、焼土面は底面のほぼ中央に認められる。ピットはP1～P3が相当するものと考えられるが、掘り込みが浅い事、形状も小規模である事、配列がやや不規則な事などから主柱穴と判断するには困難であった。

遺物は出土していない。

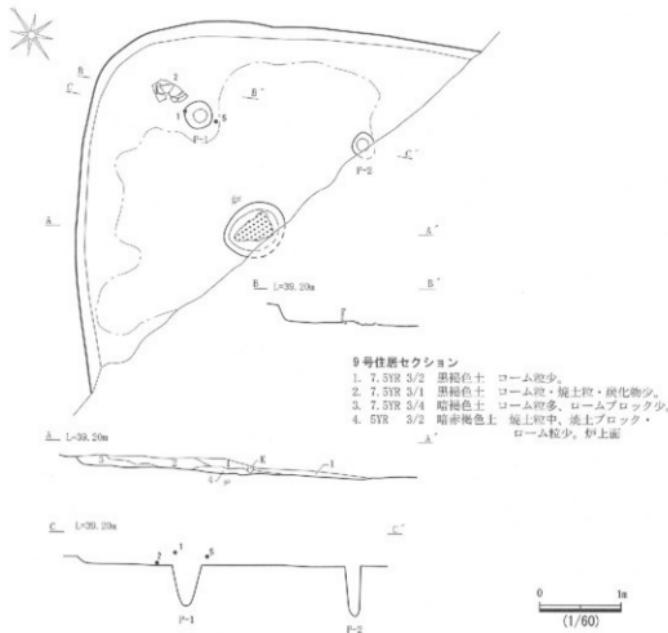


第15図 8号住居実測図

### 9号住居 (SL-09: 図版第16図・写真図版4)

本跡は、調査区内で最も低い地点に立地し、南側は搅乱が著しく、形跡を確認するには困難な状況であった。住居の残存率は約60%で、住居の形状はやや主柱穴の配置から横ね隅丸長方形を呈したものと考えられる。住居の規模は、現状確認される範囲で長軸4.74m、短軸は4.73m、壁高は9～10cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向は北東壁線より求め、N-34°-Wを指す。覆土は、壁際の状況からレンズ状に堆積する自然堆積層を呈していると思われる。床面は直床で、住居中央部でよく踏み締められている。炉跡は住居内のほぼ中央に配置されていると考えられ、形状は梢円形を呈する。規模は長径0.78m、短径0.60m、深さ9～10cmの掘り込みに、焼土面は底面のほぼ中央に認められる。主柱穴はP1～P2が相当する。残りの主柱穴及び出入り口施設に伴うピットや貯蔵穴は確認されなかった。

遺物は、弥生後期の壺形土器の破片が主体で出土している。出土遺物の総点数は82点で、出土状況は北側隅のP1付近に形状を留める遺物が出土している。

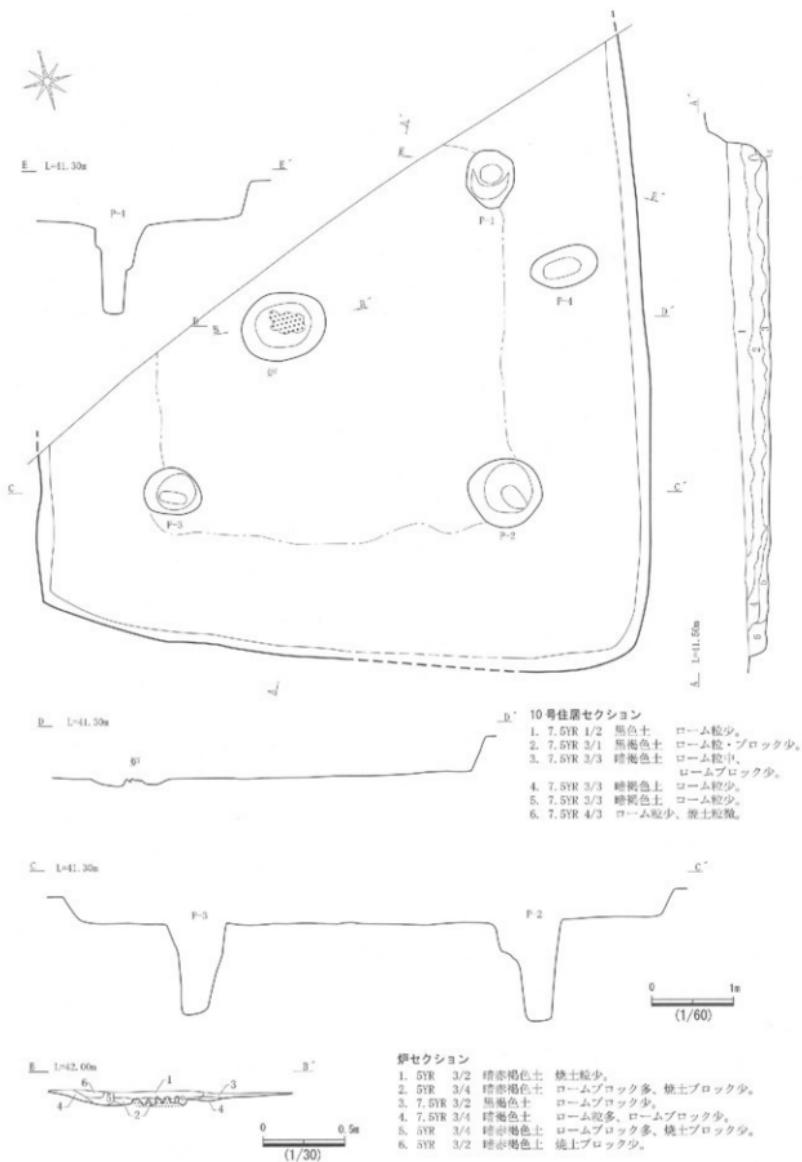


第16図 9号住居実測図

#### 10号住居 (SI-10: 図版第17図・写真図版5)

本跡は、調査区北西端のA1・B1グリッドに位置する。本跡の北側は調査区外となり、南西側では1号住居と1号竪穴に重複し、何れの遺構よりも本跡が新しい。残存率は約60%で、住居の形状は炉や主柱穴の配置から、概ね隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は現状確認される範囲で、長軸7.72m、短軸は7.48m、壁高は33~35cmを測り、外傾して立ち上がる。調査区内では最も大型となり、主軸方向はがくの配置状況から短軸にあると考えられ、南壁線より求めた方向はN=70°~Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は直床で、住居中央の主柱穴に囲まれた範囲で硬化が顕著である。炉跡は住居内の中央やや西寄りで確認され、形状は梢円形を呈する。規模は長径1.05m、短径0.81m、深さ9cmの掘り込みに、焼上面が底面のほぼ中央に広がっている。主柱穴はP1~P3が相当し、もう1本の主柱穴は調査区外に遺存するものと思われる。主柱穴の規模は径が0.70~0.90mを測り、深さも120cm前後を有する大型である。P4は出入り口施設に伴うものと考えられるが、形状や規模、周囲の床面の状況からやや判断に苦しむところである。

遺物は、弥生後期の壺が主体で出土している。出土遺物の総点数は537点であるが、7割近くが注記も不可能な細片である。出土状況は、覆土中1層から2層にかけての出土が主でほぼ均一に出土しており、覆土中第2層中の出土が若干多目である。



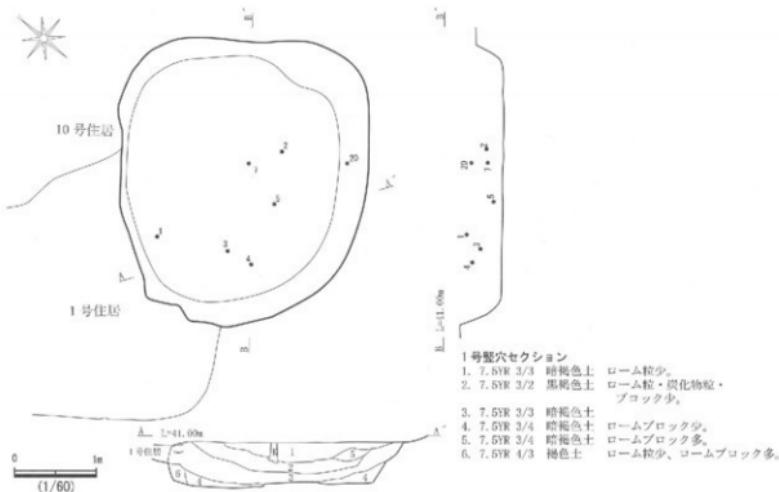
第17図 10号住居実測図

## (2) 壺穴

### 1号壺穴 (SI-II : 国版第18図・写真図版5)

本跡は、調査区北西端のA1・A2・B1・B2グリッドにまたがって位置する。北側から北西側にかけて1号住居と10号住居に重複し、10号住居より古く、1号住居より新しい。壺穴の形状は概ね隅丸方形を呈するが、各コーナー部分が丸みを持ち、やや楕円形に近い形となっている。規模は、長軸3.54m、短軸は3.04m、壁高は50cmを測り、外傾して立ち上がる。主軸方向は北西壁線より求め、N-39°-Eを指す。櫻上はレンズ状に堆積する自然堆積層を呈している。床面は平坦であるが、特に踏みしまった部分は見当たらず、炉跡や柱穴、出入り口等の住居に伴う施設は確認されなかった。本跡は当初、住居であると考えられたため、SI-IIとして調査していたものであるが、炉や柱穴等住居に伴う構築物が確認されなかった事や、規模が小さかった事から壺穴状遺構として扱うこととした。

遺物は、弥生後期の壺形土器が主体で出土している。出土遺物の総点数は1202点をかぞえ、調査区内の遺構の中で最も多くの出土量を持つが、その内の半分は注記の施せない細片である。出土状況は、上層からの出土が最も多く、1~2層中の出土が大部分となっている。特に形状を留める遺物ほど上層からの出土となり、投棄されたものと考えられる。



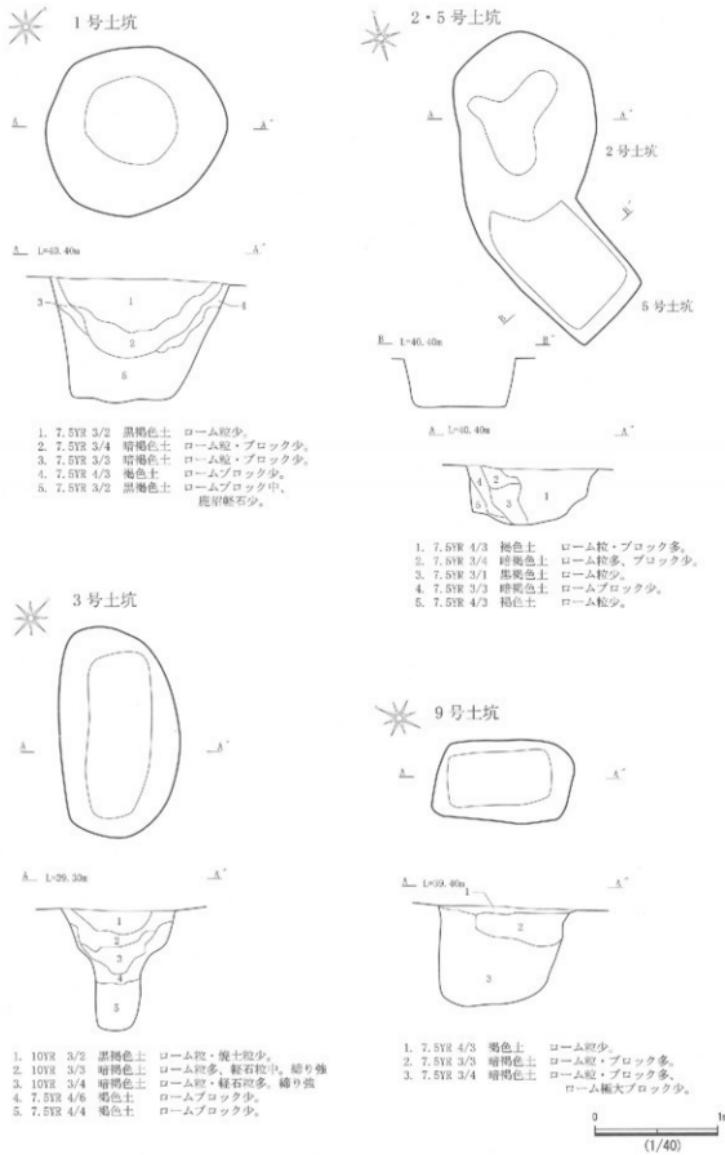
第18図 1号壺穴実測図

## (3) 土坑 (SK : 国版第14・15・19図・写真図版6)

土坑は、調査区内において14基確認されている。それぞれの土坑は、平面形状から円形（1号土坑）、長方形（3~14号土坑）、不整形（2号土坑）に3区分されている。

1号土坑は調査区内で、唯一円筒状を呈した土坑で、出土遺物は覆土の最も上層部分より敲き石が出土しているのみである。井戸の可能性が指摘される。2号土坑も当初は円形を呈するものと思われたが、不整形な形状で、覆土中に鹿沼軽石などを多量に含み、層位の逆転現象が認められている事から、風倒木痕と判断される。3号土坑は平面形状が長方形を呈するが、断面形状がやや先細りとなり、深さも約1m有することから陥し穴の可能性がある。4~14号土坑は箱型の土坑で、2~4基程の集合体で規則的な配置を見せてている。いずれの土坑も、黒色土に多量のロームブロックを含んだ綿まりの弱い覆土である。その内9号土坑の覆土中からは、昭和18年発行の1錢硬貨が出土した事から、4~14号土坑は現代の所産と考えるのが妥当と思われる。

各土坑の規模や形状については第1表・土坑一覧表に記載してある。



第19図 1,2,3,5,9号土坑実測図

第1表 土坑一覧表

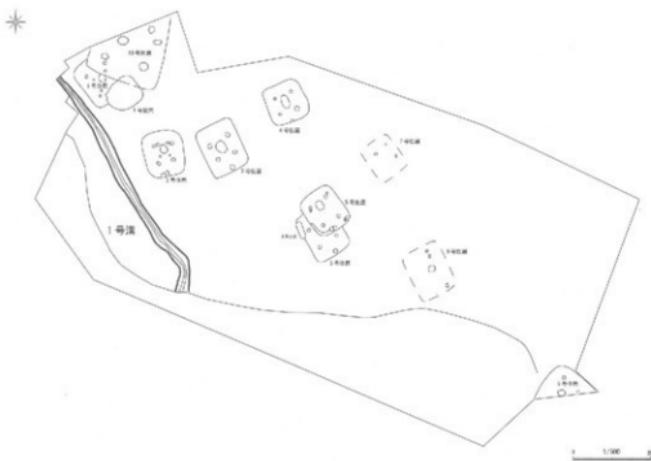
遺構	位置 (グリッド)	形状 (平面・断面)	規模 (長軸×短軸×深さ) cm	主軸	備考
SK-01	D3	円形・筒状	157 × 137 × 172	N-59°-E	井戸の可能性あり。
SK-02	D2	不整形・不規	152 × 115 × 44	N-13°-E	板倒木痕と思われる。
SK-03	F4	長椭円形	172 × 98 × 97	N-46°-W	隨穴。
SK-04	C3	長方形	178 × 59 × 27	N-21°-W	6号住居と重複。本跡が新しい。
SK-05	D2	長方形	< 120 > × 82 × 24	N-29°-W	
SK-06	D2	長方形	148 × 83 × 38	N-26°-W	
SK-07	D2	長方形	155 × 84 × 43	N-28°-W	
SK-08	D1・D2	長方形	118 × 52 × 54	N-28°-W	昭和18年発行1段鉄貨出土
SK-09	F3	長方形	112 × 67 × 79	N-24°-W	
SK-10	D3・E3	長方形	138 × 73 × 70	N-61°-E	
SK-11	D3・E3	長方形	125 × 92 × 60	N-64°-E	
SK-12	D4	長方形	145 × 81 × 42	N-84°-E	
SK-13	C4	長方形	124 × 65 × 40	N-31°-W	
SK-14	F3	長方形	122 × 68 × 43	N-35°-W	

## (4) 溝

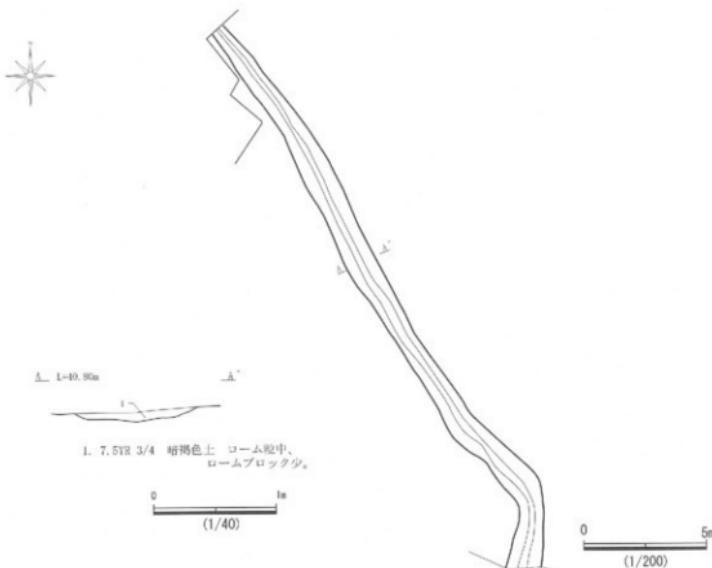
## 1号溝 (SD-01: 図版第20・21図、写真図版5)

本跡は、調査区西端のA1・A2・B3に亘って所在する。調査区の頂部から西侧に向かって傾斜する斜面地を走る形で横切っている。溝の断面形状は浅い幅広のV字状を呈し、規模は、確認される範囲での全長が26m以上、北側は調査区外に延び、南側は段差面で削り取られたようである。走行方向はN-70°-W、段差に至る直前でN-15°-Eに方向を変えている。幅は0.21～0.62mで斜面部ほど広くなる傾向にあり、深さは13～15cmとなる。覆土は浅く、单層のみの確認である。

遺物は、弥生土器片が主体で出土し、出土遺物の総点数は46点で、ほとんどが細片である。溝の北端では弥生後期・壺形土器の破片が覆土中より出土している。



第20図 1号溝位置図



第21図 1号溝実測図

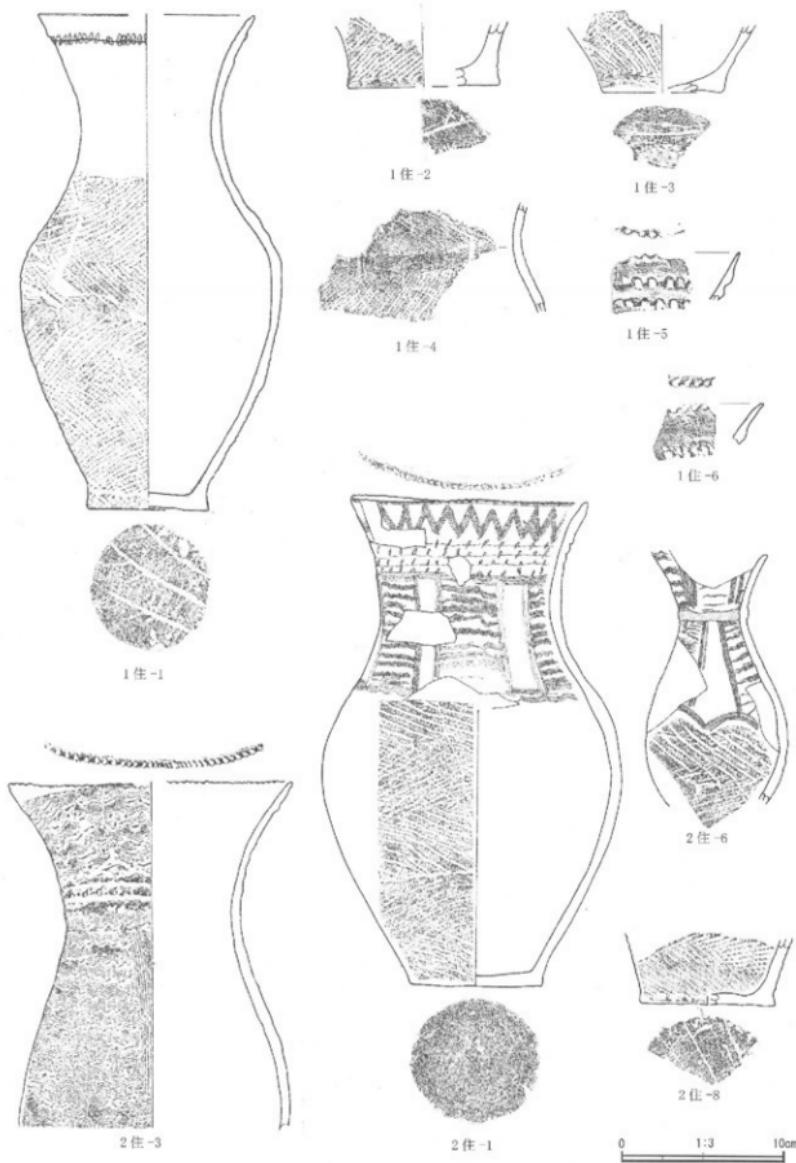
### 第3節 出土遺物

今回の出土遺物は、ほとんどが住居跡からの出土遺物である。

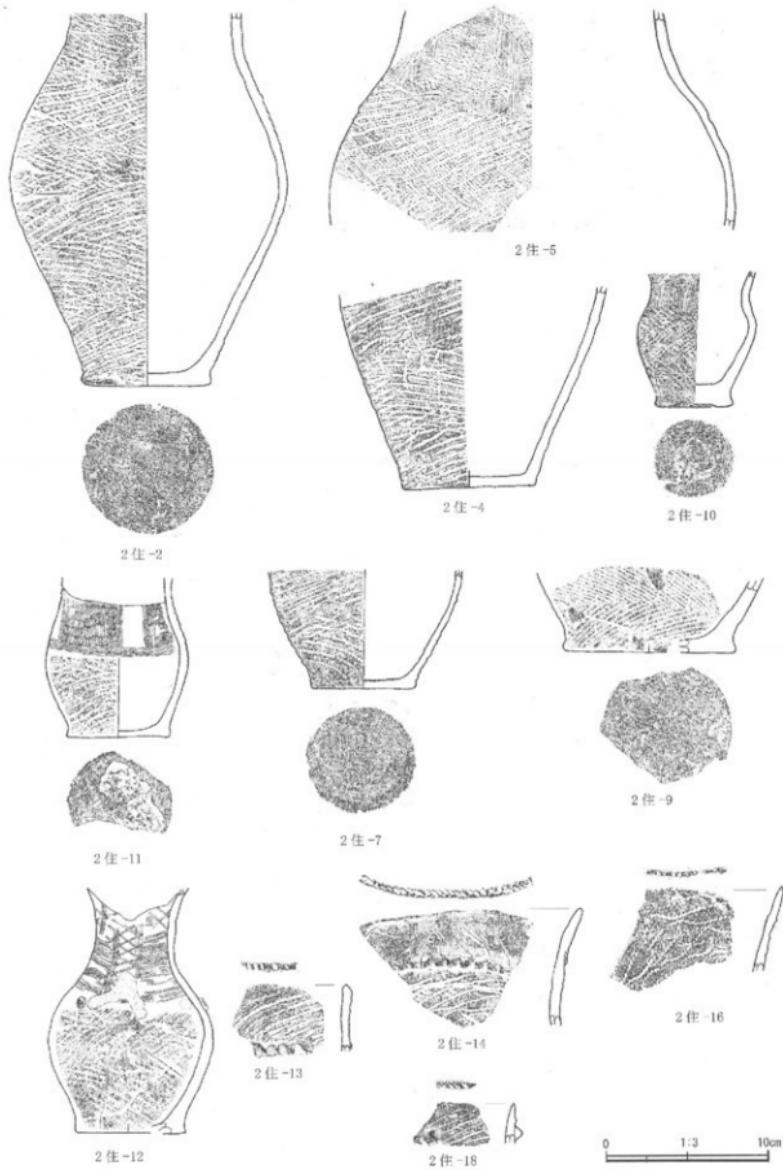
土器は、弥生時代の縄形土器の破片が大半で小破片が主体となっている。本書には、接合により形状を留めたもの及び住居の時期が特定される破片を中心に図示し、内容については出土遺物観察表（第2表～第4表）に記載してある。

弥生時代の遺物は、後期後半の土器片が主体で出土している。口唇部では、口唇部に縄文原体を押圧しているものと、ヘラ状工具による削みを施しているものがあり、前者の施文が多く見受けられる。口唇部下端の隆帯にも縄文原体を押圧しているものが多く認められる。頸部片は櫛歯状工具による櫛彫文が主体となり、櫛歯の状態から複数の系統が混在しているものと考えられる。胴部片は付加条縄文の施文されたものがほとんどで、全体的には2種が多く出土しているが、1種も比較的多く認められる。その内の大半は羽状構成をとっている。若干ではあるが、単筋縄文を施したものも出土している。頸部片や胴部片における縄文の施文内容から、異系統の土器が混在することが明らかであり、中には地元土器と異系統の上器の技法が融合するものも確認されている。

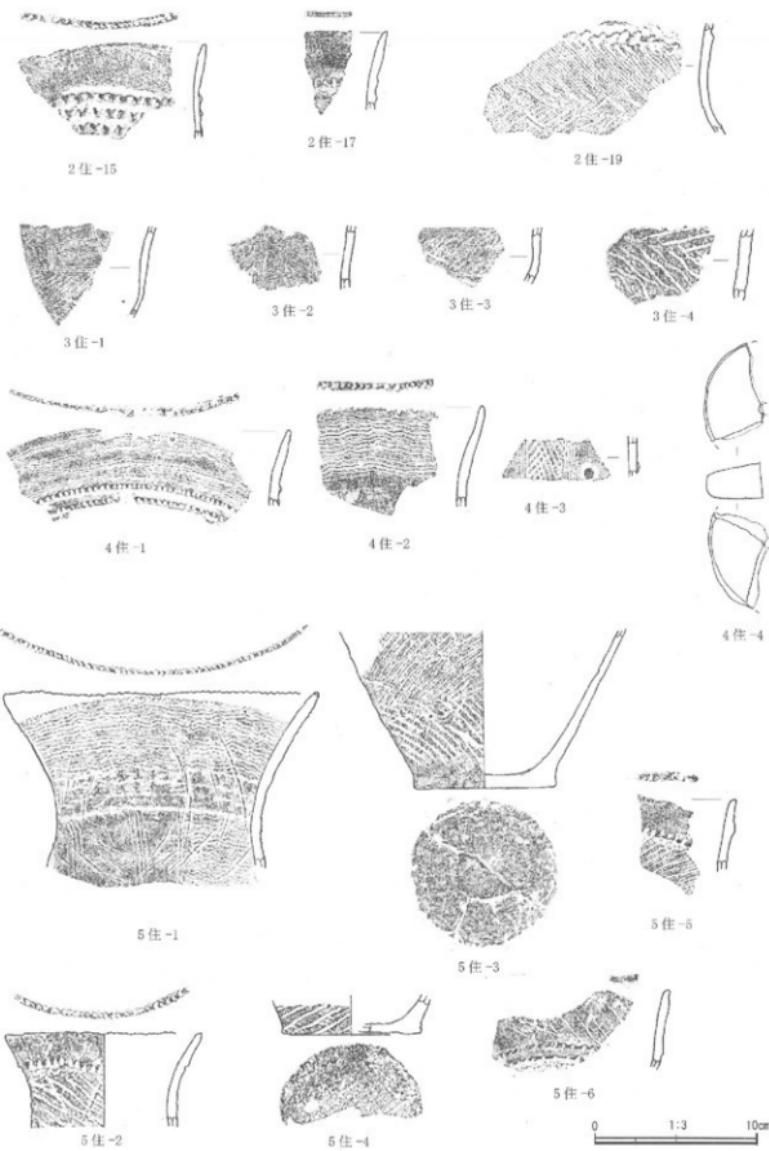
弥生時代以外の遺物としては、僅かに縄文土器片が遭構確認時に表面採取され、縄文時代前期中葉から中期前葉のものである。石器も1点出土しており、隨穴と判断される3号土坑との関連が示唆されるところである。その他、長方形を呈した土坑（4～14号土坑）からは、昭和18年発行の1銭硬貨が出土している事から、現代の所産と考えられる。



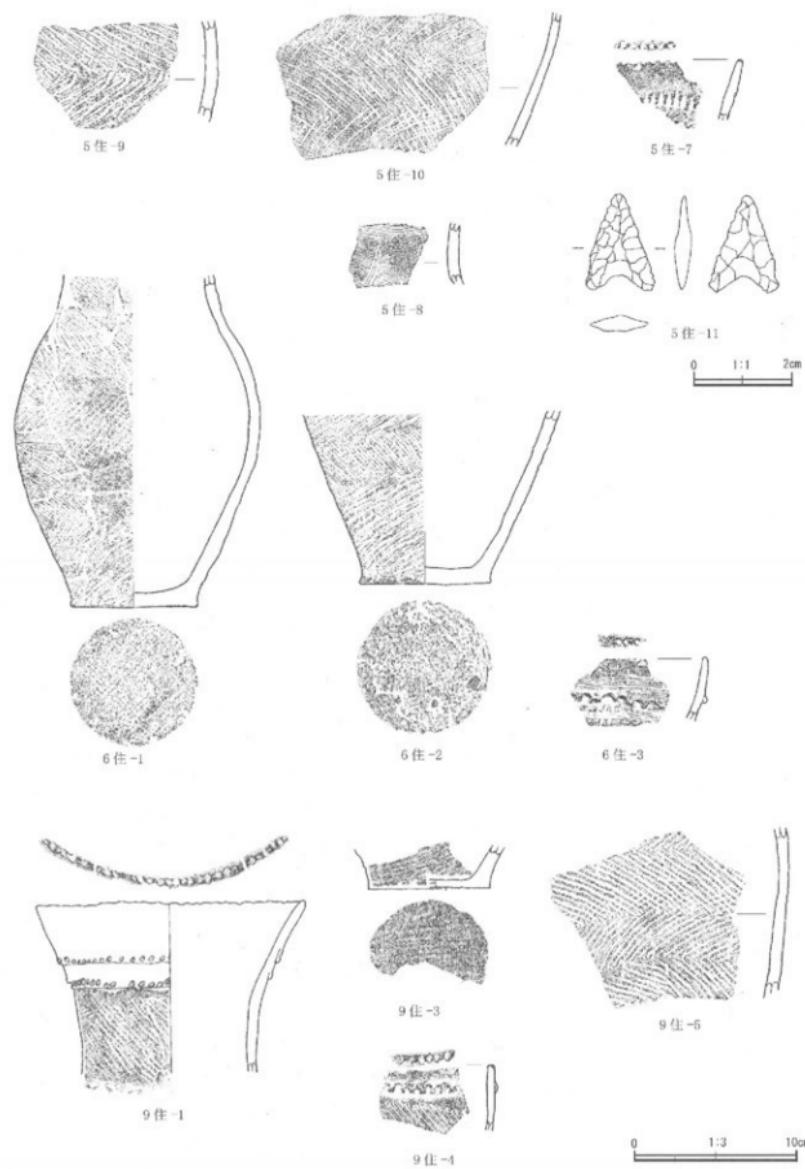
第22图 出土遗物实测图



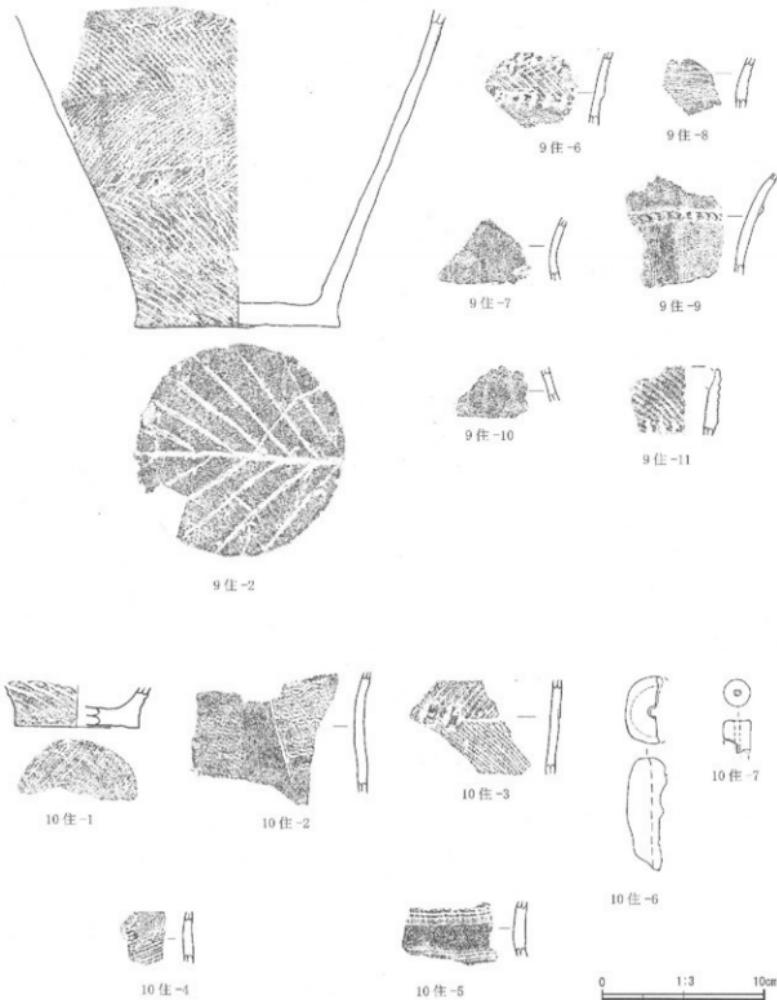
第23図 出土遺物実測図



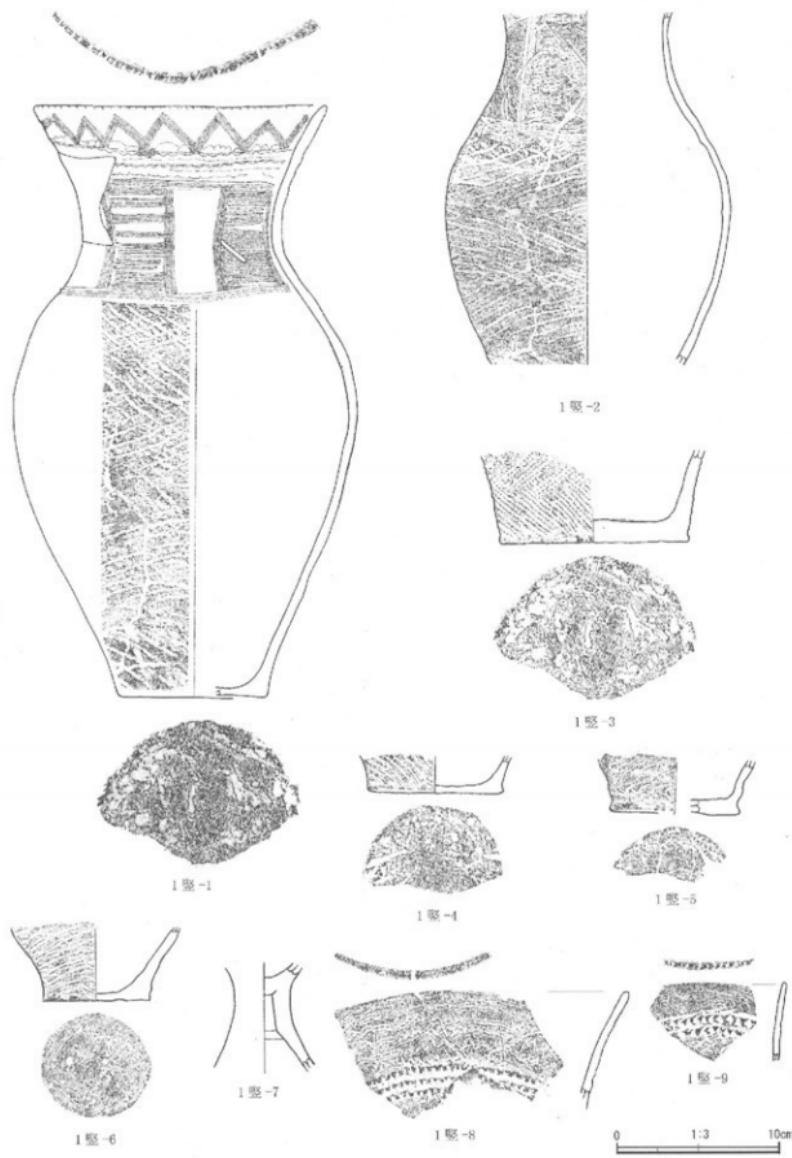
第24図 出土遺物実測図



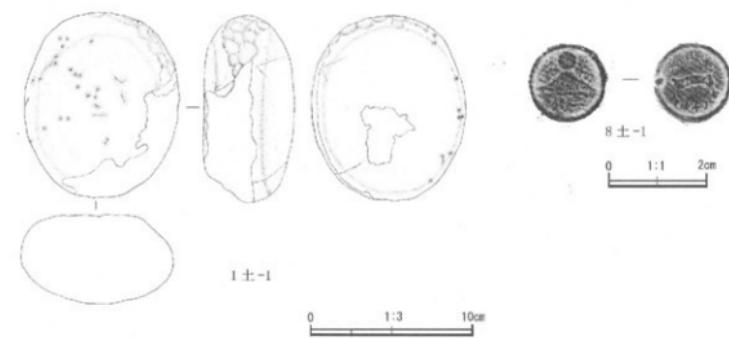
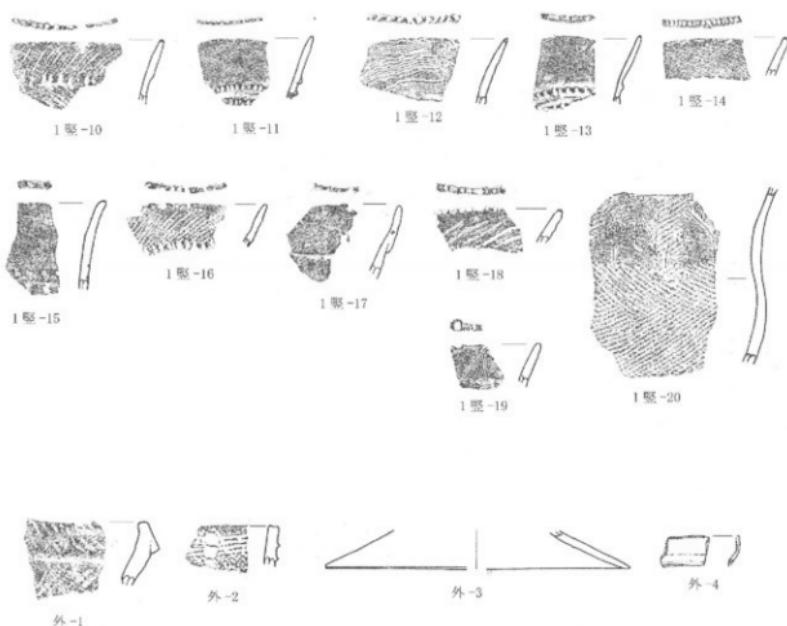
第25圖 出土遺物実測図



第 26 图 出土遗物实测图



第27圖 出土遺物實測圖



第 28 図 出土遺物実測図

第2表 出土遺物観察表（土器）

団版番号	造構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎上	焼成	色調	備考
1住-1	SI-01	弥生土器 広口壺	(13.3) 30.4 7.4	口縁部は摩滅が著しい。口縁部は複合口縁で下端を圓文原体で圧痕。頸部は無文。胴部は付加条2種で縦文で羽状構成をとる。底面は木葉底。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 赤褐色	残存率80% 既出土
1住-2	SI-01	弥生土器 広口壺	(3.9) (9.3)	腹部～底部片。胴部は付加条1種(付加2条)で縦文が施され、底面は木葉底。	長石・石英 雲母	普通	褐色	Pit-1 既出土
1住-3	SI-01	弥生土器 広口壺	(4.1) (7.4)	頸部～底部片。胴部は付加条2種(付加2条)で縦文が施され、底面は木葉底。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 橙色	一括出土
1住-4	SI-01	弥生土器 広口壺	(6.4) —	頂部片。口縁部と胴部は無文帶で区画する。口縁部・長石・石英 頭部とともに付加条1種が施され、口縁部側の施文に乱れが認められる。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 黄褐色	確認時未採
1住-5	SI-01	弥生土器 広口壺	(3.0)	口縫部片。口縫部は棒状工具による押印。口縫部は無文。雲母 頭部下端は多段になって下向きの刺突が施される。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 褐色	既出土
1住-6	SI-01	弥生土器 広口壺	(2.5)	口縫部片。口縫部は棒状工具による刻み。口縫部は無文。雲母 頭部下端は縦文原体による圧痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 褐色	一括出土
2住-1	SI-02	弥生土器 広口壺	14.3 29.8 8.0	口縫部は縦文原体の圧痕。口縫部は櫛状工具(4本)による山形文。山形部と頸部は隆脊4条で区画。頸部 は櫛状工具(4本)による縦文原体スリットが6区画。区画内には波状横彫文が帯に充填される。頭部と胴部は 羽状彫文で横走して区画。胴部は付加条2種(付 加1条)で縦文で羽状構成をとる。底部は布目压痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 黄褐色	残存率80%
2住-2	SI-02	弥生土器 広口壺	(22.7) (7.6)	頭部～底部片。胴部は付加条2種(付加1条)で縦文が施され、頭部と胴部下端は羽状構成をとる。底部は布目压痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 黄褐色	残存率60%
2住-3	SI-02	弥生土器 広口壺	(17.3) (21.2)	口縫部～頭部。口縫部では、口縫部にへラ状工具により羽状構成をとる。頭部と胴部との区画にはボタ ン状貼付文の痕跡が認められる。底部は布目压痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 橙色	残存率60% 02-4が同一の頭部～底部と思われる
2住-4	SI-02	弥生土器 広口壺	(11.8) 8.0	頭部～底部片。頭部は付加条2種(付加1条)が施文され、羽状構成をとる。底部は布目压痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 橙色	02-3が同一の頭部～底部と思われる
2住-5	SI-02	弥生土器 広口壺	(13.5)	頭部～頸部片。頭部は櫛状工具(4本)により、頭部スリットには櫛彫文がはみ出たりと、誰な作りが 認められる。区画内には波状横彫文が充填。胴部は付加 条2種(付加1条)で縦文で羽状構成をとる。頭部上半 は逆L字形による施文の量より格子状となる。	長石・石英 雲母	普通	浅黄色	残存率20%
2住-6	SI-02	弥生土器 片口壺	(15.2)	頭部～頸部片。頭部は最ももつれた部分が1条の跡帶で区分され、櫛状工具(3本)の櫛彫文で頭部上半は6 区画のスリット、下半は4区画のスリットが施される。スリット内は波状横彫文が充填される。頭部と胴部は 連弧文様の櫛編で区画され、胴部は付加条2種(付 加1条)で縦文で羽状構成となる。	長石・石英 雲母	良好	橙色	残存率50%
2住-7	SI-02	弥生土器 広口壺	(7.3) (7.3) 6.4	頭部下位～底部片。頭部は付加条2種(付加1条)で縦文が施され、上位に行くほど施文である。底面は摩滅が著しい。	長石・石英 雲母	普通	黄褐色	
2住-8	SI-02	弥生土器 広口壺	(4.2) [8.4]	頭部下端～底部片。頭部は付加条1種(付加2条)で縦文で羽状構成をとる。底面は木葉底。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 橙色	
2住-9	SI-02	弥生土器 広口壺	(4.7) [10.4]	頭部下端～底部片。頭部は付加条1種(付加2条)で縦文で羽状構成をとる。底面は摩滅するが布目压痕か。	長石・石英 雲母	普通	灰黃褐色	
2住-10	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	(8.3) 4.6	表面のミニチュア土器。口縫部欠損。頭部は無文で胴部は付加条1種(付加2条)で羽状構成をとる。	長石・石英 雲母	普通	橙色	残存率80%
2住-11	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	(9.8) 6.3	透形のミニチュア土器。口縫部欠損。頭部は櫛状工具(4本)による縦文原体スリットが4区画施文され、 区画内には同様の櫛状工具を用いて縱方向に連続の刺突を施す。底面は布目压痕。	長石・石英 雲母	普通	にぶい 黄褐色	残存率70% 一括出土

図版番号	遺構	種別 断面	口径 器高 底径	断面及び文様	胎土	焼成	色調	備考
2住-12	SI-02	弥生土器 広口壺 (小型)	— (15.0) [6.8]	円形のミニチュア土器。口辺部及び底部欠損。頸部は縦区画スリットの櫛描文が施され、スリット内はハラ状工具による格子状の櫛描文。区画内は波状櫛描文が充填される。頭部の上位と下位で区画では区分され。同様の文様体を交互に施してある。さらに頭部下位ではボタン状貼付文が等間隔で施される。副部は付加条2種(付加1条)繩文で斜状構成をとる。	長石・石英 赤色粒子	普通	にぶい褐色	残存率 50%
2住-13	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.1) —	口唇部。口唇部はハラ状工具による刻み。口辺部は付加条2種(付加1条)繩文。口辺部下端は棒状工具による刻みが加えられる。	長石・石英	普通	褐色	
2住-14	SI-02	弥生土器 広口壺	— (7.2) —	口縁部。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は無文の複合工具で、口縁部下端は押圧される。頭部は付加条2種(付加1条)繩文で施される。	長石・石英	普通	にぶい褐色	下層一括出土
2住-15	SI-02	弥生土器 広口壺	— (5.7)	口縁部一部断面。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は無文で頭部との区画に3本以上の隆帯が横走させ、頭部上を押す。	長石・石英	普通	にぶい褐色	下層一括出土
2住-16	SI-02	弥生土器 広口壺	— (5.2) —	口縁部。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は櫛条文が無文で施されている。	長石・石英	普通	にぶい褐色	床着出土
2住-17	SI-02	弥生土器 広口壺	— (4.8) —	口縁部。口唇部は細かい刻み。口辺部は無文で、頭部との区画に隆帯が施され、隆帯を挟んで櫛状工具(4本)による波状櫛描文が施される。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	Pit-1 一括出土
2住-18	SI-02	弥生土器 広口壺	— (2.5)	口縁部。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は付加条2種(付加1条)に、イボ状突起が施されている。	長石・石英	普通	灰褐色	床着出土
2住-19	SI-02	弥生土器 広口壺	— (6.9)	口縁部へ頭部。口縁部下端は隆密上を、繩文原体による刻み。頭部は付加条1種(付加2条)繩文で斜状構成をとる。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
3住-1	SI-03	弥生土器 広口壺	— (5.1)	頭部。櫛状工具(4~6本)による縦区画スリットが施す。スリット内は横模の櫛描文が充填される。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
3住-2	SI-03	弥生土器 広口壺	— (4.0)	頭部。縦な縦区画スリットの櫛描文で、スリット内も波状の櫛描文が無文で充填される。	長石・石英	普通	灰褐色	
3住-3	SI-03	弥生土器 広口壺	— (3.6)	胸部。頭部は横線の櫛描文で区画。付加条2種(付加1条)繩文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	pit-2 一括出土
3住-4	SI-03	弥生土器 広口壺	— (4.5)	胸部。擦り戻しの付加条繩文で斜状構成をとる。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
4住-1	SI-04	弥生土器 広口壺	— (4.7)	口縁部。口唇部は繩文原体の圧痕。口辺部は波状櫛描文を全体に横走させる。多段の複合口縁で、下端には繩文原体圧痕による刻み。	長石・石英	普通	灰褐色	
4住-2	SI-04	弥生土器 広口壺	— (6.4)	口縁部。口唇部はハラ状工具による刻みが施され、頭部は櫛状工具(3~4本)による波状櫛描文が全体に施文される。頭部との区画は不明瞭な隆帯が横走する。	長石・石英	普通	明黄褐色	上層一括出土 5住-1と 接合
4住-3	SI-04	弥生土器 広口壺	— (2.1)	頭部。櫛状工具(6本)による縦区画スリットの櫛描文が施され、スリット内は繩文が充填され、斜状構成をとる。ボタン状貼付文が施される。	長石・石英	普通	灰褐色	5分野 05-1と同上 層一括出土
5住-1	SI-05	弥生土器 広口壺	19.0 (10.7)	口縁前へ頭部。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は櫛状工具(4本)による波状櫛描文。頭部は縦区画2つでスリットを5区画構成し、区画内の内4区画には波状櫛描文を施す。残り1単位はヘラ状工具による格子状の櫛描文を施す。格子状櫛描文が施された区画の脇は波状櫛描文が充填された区画の脇より突いて。	長石・石英 針状鉱物	普通	にぶい黄褐色	頭部へ頭部 上平。 4住-3と接合
5住-2	SI-05	弥生土器 広口壺	[12.0] (5.8)	口縁部。口唇部は繩文原体圧痕。口辺部は無文で、口縁部下端は棒状工具による崩壊が施される。頭部は付加条2種(付加1条)繩文。	長石・石英 雲母	普通	褐色	
5住-3	SI-05	弥生土器 広口壺	— (9.6) 8.6	胸部下平へ底部。胸部は付加条2種(付加1条)繩文が波状構成をとる。底面は布目圧痕。	長石・石英 赤色粒子	普通	にぶい褐色	残存率 30%
5住-4	SI-05	弥生土器 広口壺	— (2.4) [8.6]	胸部下平へ底部。胸部は付加条2種(付加1条)繩文が施文される。底面は布目圧痕。	長石・石英	普通	にぶい黄褐色	
5住-5	SI-05	弥生土器 広口壺	— (4.0)	口縁部へ頭部。口唇部は摩擦のため不明瞭である。頭部は無文の複合口縁で、口縁部下端は繩文原体による圧痕。頭部は付加条1種(付加2条)繩文が施す。	長石・石英	普通	にぶい褐色	上層一括出土

図版番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
5住-6	SI-05	弥生土器 広口壺	— (4.8)	口縁部片。口縁部は墨識しており不明瞭。口辺部はRの擦痕が施文。口縁部下端は多段の複合口縁で棒状工具による刻みが施される。	長石・石英	普通	明赤褐色	上層一括出土
5住-7	SI-05	弥生土器 広口壺	— (3.7)	口縁部片。口縁部は墨文原体圧痕。口縁部は無文。口縁部下端は棒文原体の圧痕による刻み。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土
5住-8	SI-05	弥生土器 広口壺	— (3.9)	頭部片。櫛齒状工具(7~8本)の櫛描文が無造作に施されている。	長石・石英	普通	明黄褐色	下層一括出土
5住-9	SI-05	弥生土器 広口壺	— (6.2) —	頭部片。輪縄不明の付加条2種繩文と振り戻しの付加条繩文が斜状に施文される。	長石・石英	良好	明赤褐色	
5住-10	SI-05	弥生土器 広口壺	— (2.1) —	胸部片。輪縄不明の付加条2種繩文が羽状に施される。	長石・石英	普通	にぶい 横褐色	
6住-1	SI-06	弥生土器 広口壺	— (20.2) 7.6	胸部は付加条2種(付加1条)繩文を施し、羽状構成をとる。底面は布目压触。	長石・石英	普通	にぶい 横褐色	
6住-2	SI-06	弥生土器 広口壺	— (10.5) 8.0	胸部~底部片。胸部は付加条1種(付加2条)繩文と振り戻し付加条繩文が羽状に施文されている。底面は墨識が著しい。	長石・石英・雲母	良好	にぶい 黄褐色	
6住-3	SI-06	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	口縁部。口縁部は棒状工具による刻み。口辺部下端の隆起上には棒状工具による刺突。口縁部から頸部は櫛描文が無造作に施文。	長石・石英	普通	にぶい 褐色	床着出土
9住-1	SI-09	弥生土器 広口壺	— (16.4) (10.5) —	口縁部~頸部片。口縁部は繩文施文。口辺部は無文の複合口縁で、複合部が2段にわたり、刺突窓が施されている。頸部は付加条1種(付加2条)が施文される。	長石・石英・雲母	良好	にぶい 黄褐色	
9住-2	SI-09	弥生土器 広口壺	— (19.1) 12.9	胸部~底部片。胸部は付加条1種繩文(付加2条)により羽状構成をとるが、中段に振りの異なる原、雲母が付加されている。底面は木葉痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 横褐色	
9住-3	SI-09	弥生土器 広口壺	— (12.5) 7.4	胸部~底部片。胸部は付加条1種繩文(付加2条)。底面は布目压触。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 黄褐色	一括出土
9住-4	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.0) —	口縁部片。口縁部は繩文原体圧痕。口辺部は無文の複合口縁で、口縁下端は繩文原体による刻み。	長石・石英	普通	灰褐色	一括出土
9住-5	SI-09	弥生土器 広口壺	— (10.4)	胸部片。付加条1種(付加2条)繩文と振り戻しによる繩文が羽状に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 褐色	
9住-6	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.1)	口縁部片。口辺部は付加条1種(付加2条)繩文。口縁部下端は繩文原体による刺突。	長石・石英	普通	黒褐色	確認時表採
9住-7	SI-09	弥生土器 広口壺	— (4.5) —	口縁部片。口辺部は付加条1種(付加2条)が羽状に施文。口縁部下端は棒状工具による刻み。頸部は櫛描文が斜方向に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 褐色	頸部は9住-9と同 — 一括出土
9住-8	SI-09	弥生土器 広口壺	— (3.6) —	頸部片。波衫状櫛描文が充填されている。	長石・石英	普通	黄褐色	
9住-9	SI-09	弥生土器 広口壺	— (3.1) —	頸部片。櫛描文が斜方向に施文される。	長石・石英	普通	暗赤褐色	頸部は9住-7と同
9住-10	SI-09	弥生土器 広口壺	— (6.1) —	口縁部~頸部片。口辺部は無文。口縁部と頸部は墨识によって区画され、隆起上には繩文が施文されている。頸部は櫛齒状工具(4本)による縱区画スリット。区画内は波状櫛描文が充填される。	長石・石英・赤色粒子	普通	にぶい 褐色	確認時表採
9住-11	SI-09	弥生土器 広口壺	— (2.0) —	頸部片。縦区画スリット内に横櫛描文が充填される。	長石・石英	普通	にぶい 赤褐色	確認時表採
10住-1	SI-10	弥生土器 広口壺	— (2.5) [7.5]	胸部下半~底部片。胸部は付加条2種(付加1条)繩文が施文。底面は布目压触。	長石・石英・雲母	普通	にぶい 横褐色	2層一括出土
10住-2	SI-10	弥生土器 広口壺	— (7.4) —	頸部片。櫛齒状工具(3~5本)による縱区画スリット。区画内は波状櫛描文が充填。頸部下端には下向きの連弧文が施文される。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土

回収番号	遺構	種別 器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	施成	色調	備考
10住-3	SI-10	弥生土器 広口壺	— (5.7)	口縁部片。後合口縫で、口縫部下端にはイボ状突起が施される。口辺部は付加条2種(付加1条)繩文 難読文様体は瓦・單節繩文が施文される。	長石・石英 普通	にぶい 橙色	2層一括出土	
10住-4	SI-10	弥生土器 広口壺	— (3.3)	頭部～頸部片。横齒状工具(5本)により、横繩文 が施され、下半は付加条1種(付加2条)が施文される。	長石・石英 普通	明褐色	2層一括出土	
10住-5	SI-10	弥生土器 広口壺	— (3.4)	頭部片。横齒状工具(5本)による2条の廉状文が 横走する。縦状文内は無文。	長石・石英 普通	にぶい 黄褐色	2層一括出土	
1堅-1	SI-11	弥生土器 広口壺	— 17.6 36.1 9.0	口縁部はヘラ状工具による刻み。口辺部から頭部に かけては横齒状工具(3本)による横繩文で、口縫部に山形文、頭部は巻區巻区スリットか5区巻で区巻 内は横繩文が充填。頭部と胴部の両面には横繩文を 模倣させる。胴部は付加条2種(付加1条)を施文。 胴部上位は逆方向にも施文が加えられ格子状となる。	石英・雲母 普通	にぶい 橙色	残存率 60～ 70%	
1堅-2	SI-11	弥生土器 広口壺	— (22.0)	頭部～胴部片。頭部は横齒状工具(4本)により縦 区巻スリット。区巻内は波状横繩文が充填。頭部と 胴部の区巻は追彌文が施される。頭部は輪轉不明の 付加条繩文が施文され、羽状構成となる。	長石・石英 普通	にぶい 橙色	残存率 40%	
1堅-3	SI-11	弥生土器 広口壺	— (5.5) [11.6]	頭部～底部片。頭部は単節W.繩文が羽状に施文さ れる。底面は布目压痕。	長石・石英 普通	明褐色		
1堅-4	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.3) [8.2]	頭部～底部片。頭部は付加条1種(付加2条)繩文。 底面は布目压痕。	長石・石英 普通	にぶい 橙色		
1堅-5	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.3) [8.0]	頭部～底部片。頭部は付加条2種(付加1条)繩文. 底面は木葉底。	長石・石英 普通	にぶい 橙色		
1堅-6	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.4) 6.5	頭部～底部片。頭部は付加条2種(付加1条)繩文. 底面は布目压痕。	長石・石英 普通	にぶい 黄褐色	一括出土	
1堅-7	SI-11	弥生土器 広口壺	— (6.7) —	脚部片。	長石・石英 普通	にぶい 橙色		
1堅-8	SI-11	弥生土器 広口壺	— (7.1)	口縁部片。口縁部は不明瞭。口縫部は波状横繩文が 密に施文。口縫部下端は3条の隆帯が横走し、隆帯 上にはヘラ状工具による刻みが施される。	長石・石英 普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土	
1堅-9	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.8)	口縫部片。口縫部はヘラ状工具による刻み。口縫部 下端は2条の隆帯が施され、繩文原体で押付される。 口縫部と頭部文様体は波状横繩文が密に施文され る。	長石・石英 普通	浅黄色	上層一括出土	
1堅-10	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.9)	口縫部片。口縫部は繩文原体压痕。口縫部は複合口 縫で付加条1種繩文(付加2条)が施文され、口縫 下端は繩文原体压痕が施される。	長石・石英 普通	暗褐色	2層一括出土	
1堅-11	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.9)	口縫部片。口縫部は不明瞭。口縫部は複合口縫で波 状横繩文が施文。口縫部下端は多段にわたり、棒状 工具による跡みが施される。	長石・石英 普通	橙色	2層一括出土	
1堅-12	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.1)	口縫部片。口縫部は繩文が施文される。口縫部には 5～6本單位の波状横繩文が施文される。	長石・石英 普通	にぶい 橙色	上層一括出土	
1堅-13	SI-11	弥生土器 広口壺	— (4.2)	口縫部片。口縫部は繩文が施文され、口縫部は無文。 口縫部下端は繩文原体の刺突。	長石・石英 普通	にぶい 橙色	上層一括出土	
1堅-14	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.3)	口縫部片。口縫部は棒状工具による刻み。口辺部は 付加条繩文が裕子状に施文される。	長石・石英 普通	にぶい 褐色	上層一括出土	
1堅-15	SI-11	弥生土器 広口壺	— (5.4)	口縫部片。口縫部は不明瞭ではあるが、繩文が施文 か。口縫部は無文。口縫部下端は繩文原体による刺突。	長石・石英 普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土	
1堅-16	SI-11	弥生土器 広口壺	— (3.1)	口縫部片。口縫部は繩文施文。口縫部は付加条1種(付 加2条)で下端は繩文原体の压痕。	長石・石英 普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土	
1堅-17	SI-11	弥生土器 片口壺	— (4.4)	口縫部片。折り返し口縫。	長石・石英 普通	にぶい 褐色	上層一括出土	

図版番号	遺構	種別・器種	口径 器高 底径	器形及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1堅-18	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.1)	口縁部片。口唇部は丸み。口縁部は付加条2種(付加1条)繩文。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土
1堅-19	SI-11	弥生土器 広口壺	— (2.7)	口縁部片。口唇部は細かい刻み。口辺部は橢円状工具(3本)による櫛縞文が山形状に施文される。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	上層一括出土
1堅-20	SI-11	弥生土器 広口壺	(16.8) —	頭部へ腹部片。頭部は付加条1種(付加2条)縞文が輻方向に施文され、無文体と交互に配される。頸部は付加条1種(付加2条)縞文による羽状構成となる。	長石・石英	普通	明赤褐色	
外-1	遺構外	縞文土器 深鉢	(4.0)	口縁部片。口縁部は複合化しRL單節縞文、口縁部下は單節LR縞文を施す。内面には継が認められる。	長石・石英	普通	にぶい 黄褐色	縞文中期前集
外-2	遺構外	縞文土器 深鉢	(2.6)	口唇部は面取り。口縁部は半截竹管による沈籠が横走し、円形状の突起文が垂下する。	長石・石英	普通	明褐色	縞文前期中集
外-3	遺構外	土師器 高輪カ	(2.3) (18.6)	高輪脚部標部分。	長石・石英	良好	にぶい 黄褐色	SI-01 周辺採取
外-4	遺構外	土師器 受口力	(1.8)	口縁部片。内外而ナデ調整。	長石・石英	普通	浅黄色	SI-01 周辺採取

第3表 出土遺物観察表(土・石製品)

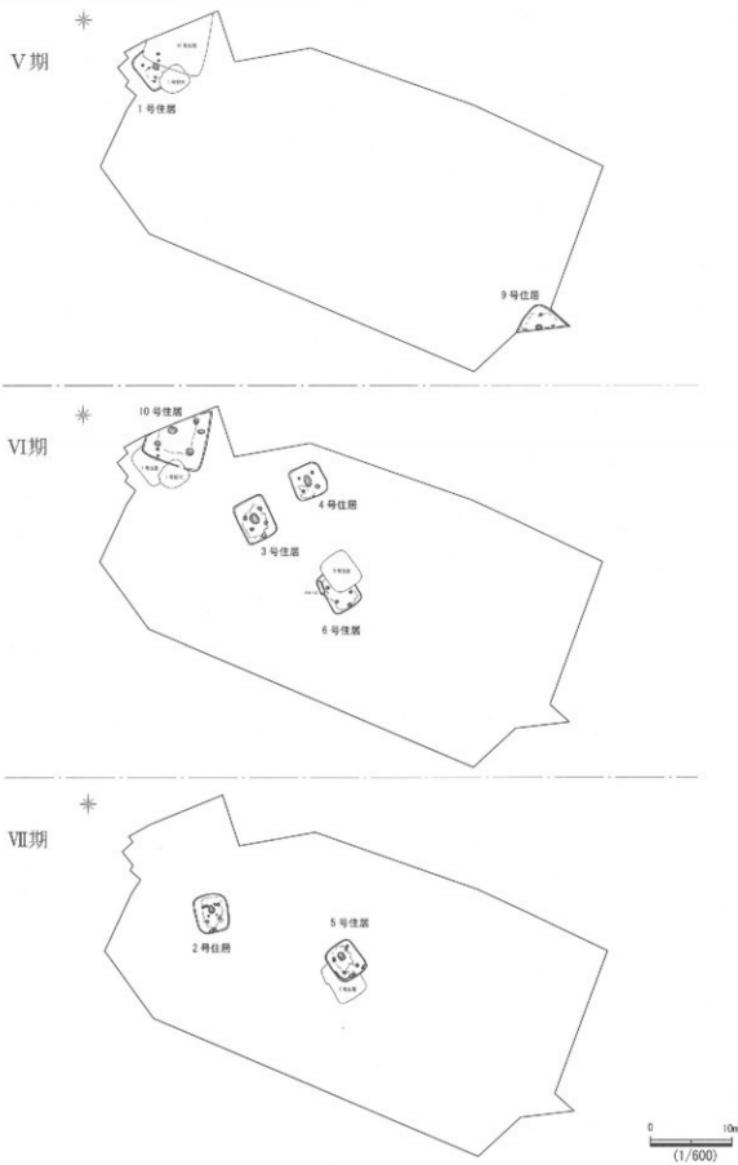
図版番号	遺構	種別・器種	径	長さ (幅)	口径	厚さ	胎土(材質)	焼成	色調	備考
4住-4	04-4	土製品・轟鐘車	[5.3]	—	[0.5]	1.5	長石・石英	良好	にぶい黄褐色	複土中より出土
10住-6	10-6	土製品・環状土鍤	2.8	4.6	0.6	—	長石・石英・ 雲母	普通	にぶい黄褐色	覆土中より出土
10住-7	10-7	石製品・管玉	1.2	(1.4)	0.3	—	矽灰岩	—	—	複土中より出土

第4表 出上遺物観察表(石器)

図版番号	遺構	種別・器種	長さ	幅	厚さ	重さ (g)	材質	備考
5住-11	05-11	石器・石錐	2.0	1.5	0.3	844	チャート	
5土-1	SK-1	石器・蔽き石	11.3	9.5	5.6	0.6	安山岩	

第5表 出土遺物観察表(金属製品)

図版番号	遺構	種別・器種	径	孔軸	重さ (g)	初踏年	材質	備考
8土-1	SK-8	銭腰貨	1.6	—	0.6	1943年	アルミ	



第29图 培谷道路集落変遷図

## 第V章 総括

今回の調査は、弥生時代後期後半の十王台期にあたる集落の調査となった。住居跡 10 軒という限られた軒数の調査ではあったが、出土遺物などからさほど時期差を持たない集落であったことが理解された。ここでは、瀬沼前川流域の現在まで得られている弥生時代後期後半における集落の成果を基に、塙谷遺跡で確認された住居跡の形態の違いと重複関係を併せて注目してみた場合、住居間の時期差をある程度検討する事が可能ではないかと考えられる。

そこで、まず住居形態や規模の差から分類をした上で、出土遺物の様相を加味し、十王台式集落の変遷を検討してみたい。

### 第1節 住居形態と規模の差異について

今回の調査では、弥生時代後期の住居跡が 10 軒と住居に間に連すると思われる竪穴造構が 1 基確認されている。重複するのは 1 号住居と 10 号住居、5 号住居と 6 号住居である。これらはいずれも弥生時代後期に比定される住居同士の重複となっている。それ以外の 6 軒は、各々単独で確認され、削平のため覆土が飛ばされてしまった 7・8 号住居、遺構の半分が搅乱を受けている 9 号住居を除いて、遺構の形態はある程度明瞭である。

確認された住居の軒数としてはさほど多くはない、明瞭に確認された住居はさらに限られるが、各住居の規模や形態、ピット等の内部施設の性格はほぼ均一の状況が窺える。その状況を細分する形で見てゆくと、若干の形態や規模、特徴の差をまとめて大まかに分類する事ができる<sup>(1)</sup>。

平面形状については、隅丸方形を呈するもの（4 号・10 号住居）と、隅丸長方形を呈するもの（1 号・2 号・3 号・5 号・6 号住居）とに分類される。住居の面積規模について、隅丸方形の住居では、50 m<sup>2</sup>を超える大型のもの（10 号住居）と、20 m<sup>2</sup>以下のもの（4 号住居）までばらつきがある。隅丸長方形の住居では、20 ~ 23 m<sup>2</sup>の範囲に入るものの（1 号・3 号・6 号住居）と、20 m<sup>2</sup>以下のもの（2 号・5 号住居）が存在し、さらにそれらの中で規模を比較してみると、20 ~ 23 m<sup>2</sup>面積規模を有する住居の長軸と短軸の比率は 1 : 1.2 を超え、20 m<sup>2</sup>以下の面積規模を有する住居は 1 : 1.2 に達しておらず、やや方形に近い形状となっている。

以上の事から、今回の調査区で確認された遺構の形態分類をまとめてみると以下のような<sup>(2)</sup>。

- I 類 大型の隅丸方形を呈し、面積規模が 30 m<sup>2</sup>以上である住居（10 号）
- II 類 小型で隅丸方形を呈し、面積規模が 20 m<sup>2</sup>以下である住居（4 号）
- III 類 中型で隅丸長方形を呈し、面積規模が 20 ~ 23 m<sup>2</sup>である住居（1 号・3 号・6 号）
- IV 類 小型で隅丸長方形を呈し、面積規模が 20 m<sup>2</sup>以下である住居（2 号・5 号）

これらの分類をもとに、周辺遺跡との比較をしてみたい。

まず小原周辺での調査事例を上記項目に当てはめてみる。谷津を挟んで対峙する丘陵地に立地した小原遺跡の 2 期にわたる調査で確認された 3 軒の弥生住居の内、いずれも IV 類に相当するようであるが、確認された遺跡の範囲が限られていることもあり、今後の成果によっては傾向に差が出てくるものと思われる。さらに小原遺跡より南方、瀬沼前川に面した丘陵地に立地する三本松遺跡では 15 軒の弥生住居が調査されている。その成果によると、規模の不明確な 3 軒を除いた 12 軒は、ほとんどが隅丸長方形又は長方形のものとなり、III・IV 類に相当するものは僅か 2 軒となっている。他の住居は、中型であっても長軸が 5.5 m を超えて 24 ~ 30 m<sup>2</sup>の面積規模になるものが 6 軒、30 m<sup>2</sup>以上の大型のものが 4 軒あり、塙谷遺跡とは若干異なる様相が窺える。

次に、小原周辺から瀬沼前川流域を下った茨城町・大戸遺跡群での調査事例と比較してみる。瀬沼前川左岸に立地する矢倉遺跡では、確認された弥生住居は 31 軒、その内形状が不明確なものを除いた 25 軒では、I 類 2 軒、II 類 5 軒、III 類 5 軒、IV 類 4 軒、これらに属しない中型から大型のものが 5 軒と、それぞれの類型がほぼ均一に確認され、全体では規模の小さいものが主体のようである。矢倉遺跡対岸の右岸に立地する人焼遺跡では、弥生住居 10 軒の内、III 類が 2 軒、IV 類が 1 軒に留まり、当てはまらない中型から大型のものが 7 割を占めている。特に大型の 40 m<sup>2</sup>を超える大型の住居が 2 軒確認されており、全体を見ても規模の大きいものが目立ち、矢倉遺跡とは違った様相を見

せている。塙谷遺跡は全体的に規模の小さい住居が主体となっており、その観点から見れば矢倉遺跡に近いと考えられる。

これらの規模の分類から、さらに内部施設との関係について見てみる。

炉の位置は、住居面積規模の差異に比例して配置に規則性が見える。比較できるものとして隅丸長方形の住居に着目すると、Ⅲ類の炉は住居のほぼ中央もしくは若干北寄りに位置するが、Ⅳ類になると、北側の主柱穴間に近い位置にまで移動していく状況である。さらに貯蔵穴と思われる掘り込みが2号・3号・5号住居で確認されており、これを炉と同様に隅丸長方形の住居の分類に照らし合わせると、Ⅲ類では出入り口施設と思われるピットの西側にやや離れて配置されるが、Ⅳ類では出入り口ピットに接している事が見て取れ、炉の配置と併せて見てゆくと非常に興味深い。(第29図参照)

以上の事から、若干ではあるが住居規模の差異と住居内施設の配置が相互に関係していることが考えられる。但し、これらは現段階で得られている資料の比較であって、他遺跡との比較には住居数の差異による違いがあるかも知れない事を念頭におかなければならず、今後の塙谷遺跡の成果が期待される。

その他には、今回調査された住居の中で特異な例が2つあげられる。

一つは、6号住居の出入り口に伴うと予想されるピットの存在で、床の硬化部分がピット上面の半分程度まで及んでいたことである。それぞれの住居では同じように南壁側中央に出入り口に伴うと予想されるピットが存在するわけであるが、6号住居の硬化部分をたち割って確認したところ、硬化下は綿りの弱い上層が堆積していることが確認されている。これらの状況から、山入りの繰り返しによって硬化したものと予想される。もう一つは、1号住居及び2号住居に見られる4本主柱穴内の小ピットである。1号住居では、丘陵していることもあって南東側の主柱穴及びこの小ピットは認められなかったが、存在したことはほぼ間違いないと思われる。1号住居の小ピットは、主柱穴のほぼ対角線上に位置している。一方、2号住居の小ピットは北側に寄っており、北側のピットは主柱穴内より若干はみ出している。この2号住居のピットの配列を見た場合、特に主柱穴を意識して補助的な柱を配したものとは考えにくく、P-8では僅かに床面の硬化した部分が被っていたことから考えても、拡張を伴う以前の主柱穴であった可能性を視野に入れておかなければならぬと思われる。

これら特異な項目については、先に述べた住居規模の分類との関係を見出すことはできなかった。今後の塙谷遺跡における類例を待ちたい。

## 第2節 塙谷遺跡の出土遺物について

それぞれの住居跡から出土した弥生土器は、広口壺の破片が主体となって出土している。形式は、十王台式十器が主流であり、財内で検討されている編年<sup>(2)</sup>に当てはめてみた場合、概ねV期(十王台1a式・長峰(新)式)からVII期(十王台式紅葉段階)の範疇に収まるものと考えられる。出土遺物の中には、十王台式土器の他に二軒屋式系や構式系、上稻吉式系といった異系統土器の施文手法が十王台式系の土器に混在する様相も見受けられ、これらを念頭に置きながら各住居における出土遺物の様相を概観してゆきたい。

1号住居では、縦区画スリットを有する十王台式の特徴を持った土器片は少ない。図示しなかったものの中には、付加条1種縄文に木葉痕を有する底部片も出土し、二軒屋系の遺物も見受けられる。主になる遺物としては1住-1があり、口部の幅が狭く頸部が無文となっているもので、同様の破片も覆土中より出土している様相から見て、十王台1a式に並行する長峯(新)式の住居と思われる。

2号住居では、広口壺のほかに片口壺や小型土器が出土しており、調査区の中では遺物の出土量や器種が多い住居となっている。2住-3は幅広の口縁部に縦区画スリット、スリット内には波状柳描文が充填される文様構成で、口縁部下端の陸帯が撫で付けられている。また2住-5は頸部から胴部のみのものであるが、スリットの幅が狭くなり、その単位の中には縦区画の柳描文が省略されている退化傾向も認められる。以上の様相からVII期に相当するものと考えられる。その一方で2住-1のように口縁部の幅が狭く隆唇が明顯なもので、VI期に相当すると思われる一段階古い遺物も出土している。双方で時頃の食い違いが認められるが、床面直上から出土するVII期の遺物が住居に伴う遺物として採用されるものと思われる。また2号住居では、胴部に連弧文が施される久慈川系と思われる2住-6、頸部が無文の霞ヶ浦周辺様相を持つ2住-10などが注目される。

3号住居では、出土遺物が小破片主体となるため、全容を把握しにくい状況であるが、縦区画スリットの手法や縄文原体の様相から、十王台1式の範疇に収まるものと思われる。

4号住居では、3号住居同様、小破片が主体となっており、図示した遺物は僅かである。4住-1はやや幅広の口辺部に波状櫛描文を施しているが、口縁部下端は多段の隆帯に繩文を押出した刻みが施されているもので、十王台式でもやや古手になると想われる。4住-2は5住-1と接合する口縁部片であるが、関連については不明である。また、スリット区画内に羽状構成の繩文を施している特異な頸部片4住-3も出土している。

5号住居では、形状を留めた遺物として5住-1の広口壺が出土しており、口縁部幅が広めである事や隆帯が撫でつけられて薄い状態である事などより、十王台式紅葉段階に相当するものと考えられる。一方、5住-3は、口縁部の幅が狭い上に口縁部下端を刺突する手法などから、形態的にも5住-1とは時期を異にした占い段階の口縁部片である。同住居から出土している他の遺物を見ても、新しい様相のものと占い様相のものが混在する状況にある。

6号住居では、6住-1の壺形土器のように付加条1種（付加2条）繩文を施したものや、6住-3の櫛描文の特徴など図示できたものは僅かながら、全体の破片から異系統土器の様相を呈している。

7・8号住居では、いずれも覆土が削平を受けており、炉及び主柱穴の確認に留まっている事から時期を判断する資料は得られていない。

9号住居では、土器口縁部が無文の二段の複合口縁で、各段に円形の刺突文が施され、頭部は付加条1種（付加2条）繩文が施されている9住-1、人型の壺形土器で底面を木葉痕が施された9住-2があり、これらはいずれも文様帯に付加条1種（付加2条）繩文が施されている。また9住-6・7・10の頸部に認められる歯齒の様相から、二軒屋系統色の濃い住居となっている。時期的には、9住-1の遺物で頸部下半に無文帯を持つ手法などは、十王台式に縱区画が採用されない段階のものと考えられ、1号住居と同様に十王台1a式並行の長峯（新）式の様相が窺われる。また出土遺物の中には、口縁部と頸部の区画として1条の隆帯上に繩文を施す特異なもの9住-9も見受けられる。

10号住居では、住居の規模に対して出土遺物の多くが小破片となっている。ほとんどが1～2層での出土となっており、その中で土器5点を抽出している。十王台式の文様構成をとるものの中には、頸部と胴部の区画に連弧文を施す10住-2があり、久慈川流域の影響が認められる。また、櫛描文の特徴を踏まえて見てゆくと、10住-3～5で北関東の二軒屋系や博式系の遺物も含まれているようである。土器の他に、紡錘車や壇状土鍤などの土製品が唯一出土している住居である。

住居ではないが、今回調査された遺構の中で最も多くの遺物が出土した1号竪穴では、十王台式が主流となっている。口縁部の文様帶には多種多様なものが出土しており、若干の二軒屋系が混在する。胴部の文様帶には付加条2種（付加1条）、底部は布目痕が主体である。1竪-1・2は文様構成から2住-1に通じるものである。二軒屋系のものとしては1竪-20があり、胴部は付加条1種（付加2条）繩文で羽状構成をとり、縦方向に付加条1種繩文を施している。また、器種の中には、1竪-7の高环片や1竪-17に片口壺の口縁部片が出土している。

### 第3節 埼谷遺跡における集落の変遷について

ここでは、住居間の切り合いによって新旧関係が明瞭な住居、1号住居と10号住居、5号住居と6号住居の出土遺物から、他の住居の出土遺物と比較し、さらには先に検討した住居形態と絡めて埼谷遺跡における集落の変遷を窺ってみたい。

1号住居と10号住居は、1号竪穴とともに重複し合っている。土層堆積状況と床面の遺存状況から、1号住居が最も古く、次いで1号竪穴、10号住居の順で構築されていた事が判明している。出土遺物からも、1号住居の様相は十王台1a式の時期と考えられている。それに対し10号住居は、図示した10住-2の土器片や、図示しなかった十王台式に伴う土器片の様相から、十王台1式の範疇に収まるものと思われ、時期差をほとんど持たないものと考えられる。1号竪穴については、覆土中の発掘遺物である可能性があるものの、1竪-1の様相が十王台1b式のものと考えられる。以上の事から重複関係は、1号住居→1号竪穴→10号住居の変遷が読み取れ、V～VI期の時期に相当するものと思われる。

次に、5号住居と6号住居であるが、遺構確認及び土層の状況から6号住居が5号住居によって埋されている事が明らかとなっている。5号住居より古い6号住居では、6住-1の壺形土器のように付加条1種（付加2条）繩文を施したものや、6住-3の櫛描文の特徴など図示できたものは僅かであるが、異系統土器の土器が主流で出土

している。一方5号住居では、遺物の項で述べたように、新しい土器と古い土器が混在して山上している。似し、遺物の出土地点・山上状況などから、5住-1の広口壺が造構の時期に採用されるものと考えられ、十手台式紅葉段階のⅦ期に相当する住居であると思われる。同じ住居から山上した古い段階の土器5住-3は、口縁部の形態や手法から時期的に十手台1a式並行の所産と思われる。この遺物は、同一のものが一括遺物の中からも出土しており、出土地点も住居下位の出土ではあるものの、十層の堆積状況から重複する6号住居からの埋没過程での流れ込みの可能性が高いものと考えられる。

重複を免れた住居を見てゆくと、2号住居は出土遺物や遺構形態から5号住居に類似性を認める事ができる。出土遺物を比較した場合、2住-5のように退化傾向が窺える事から、5号住居よりは若干新しい可能性もある。4号住居は、調査区内では唯一丸方形を呈する住居で、出土遺物は全体的に古手の様相である。その中で4住-2の口縁部片は、5住-1と接合するが、4号住居と5号住居は住居形態からも出土遺物からも関連性は不明である。9号住居は9住-1の遺物から1号住居に類似性が認められ、全体的に二軒屋系の様相を持つ点でも同時期に當まれた可能性がある。

ここで注目されるのが、各住居跡から異系統の土器、取り分け今回の調査区では二軒屋系の遺物が比較的多く山上している事である。付加条1種(付加2条)繩文が施文されるものが多く、底部では木葉痕が施された底部片が半数近く確認されている。いずれも二軒屋系Ⅲ期<sup>(4)</sup>のものが主流であると考えられる。二軒屋系が含まれる要素についての検討は、茨城町大戸遺跡群の調査において試みられている<sup>(5)</sup>が、ここでは塙谷遺跡全体での成果、傾向だけに留めておく。

最後に、住居形態をこれまでの出土遺物による住居変遷に合わせて見てゆくと、ここでも一定の規則性が当たはめられる。V～VI期に属するとと思われる住居(1・4・6・[9]・10号住居)は、先に第1節で検討したⅢ類に相当し、炉は住居のほぼ中央もしくは若干北寄りに位置し、貯蔵穴は出入りロビットから若干離れている。VII期に属するとと思われる住居(2・5号住居)はIV類に相当し、炉は北側主柱穴間に寄って構築され、貯蔵穴は出入りロビットに接している。これらの規則性を、小原地区的調査事例や、茨城町大戸遺跡群での調査事例に当てはめてみると、同様の状況を垣間見ることができる。

以上の状況を踏まえた上で、今回の調査された各住居の変遷を、前述した遺構形態と出土遺物から追ってゆくと、弥生後期後半のV期の段階で1号住居や9号住居が出現し、V～VI期の間に6号住居、或いは4号住居が後続してゆく。さらにVII期になって2号住居と5号住居が當まっていたものと考えられる。

今回の調査では、弥生時代後期後半のみの集落として調査を行ったわけであるが、既に調査が行われている小原地区の周辺遺跡では、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代の住居を伴う複合遺跡が調査されている。今回調査が行われた地点は、遺跡として括られた範囲の南端部にあたり、小文谷沿いの丘陵地最先端部のほんの一部であるが、周辺遺跡の様相から見ても塙谷遺跡が一時代に留まった集落とは考えられず、全像については今後行われる調査の成果を得たなければならぬと考える。小原地区における弥生時代後期集落の位置づけはその後となる。

#### 脚注

(1) 1・6・9・10号住居の残存率が100%でない住居の分類に際し、残存する炉や土坑穴の配置から短軸を想定した。

(2) 大～小型の分類は、海老沢徳氏の区分に依拠している。『茨城県における弥生時代研究の到達点』2000

(3) 海老沢徳氏『茨城県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』

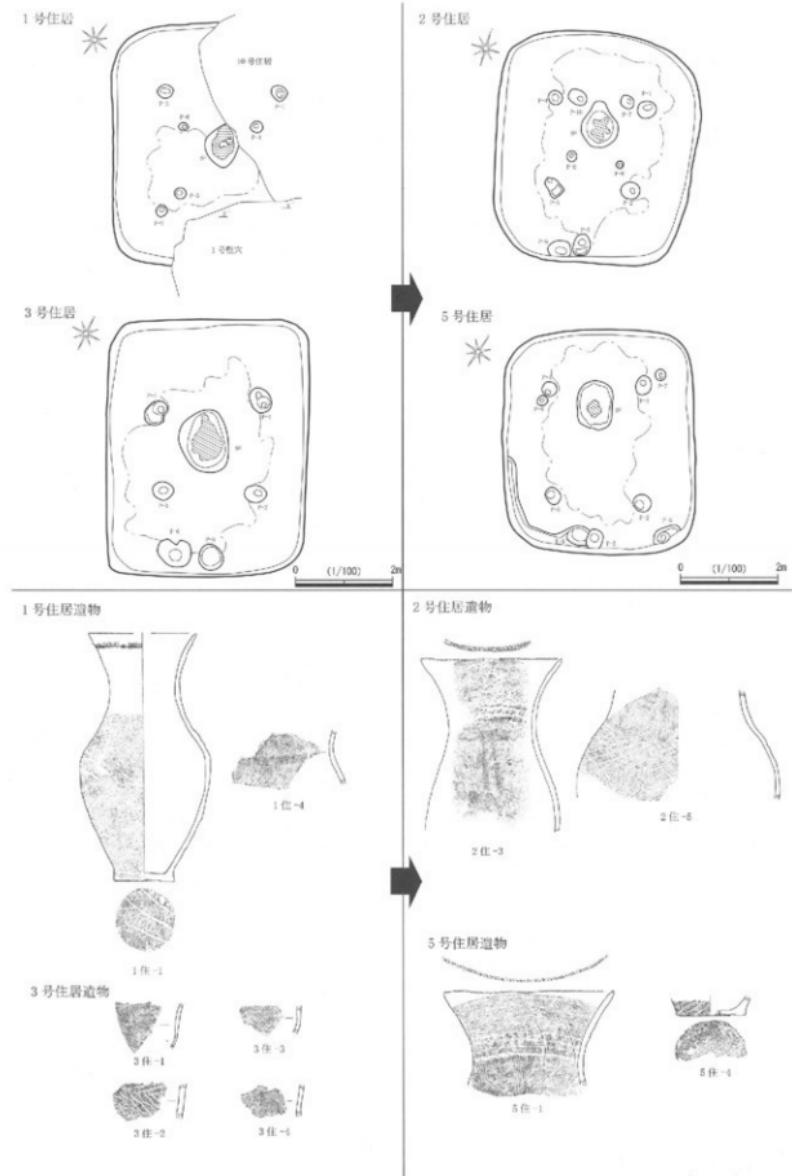
第9回東日本埋蔵文化財研究会 2000 を参照した。

(4) 藤川典夫氏『標木県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年』

第9回東日本埋蔵文化財研究会 2000 を参照した。

(5) 長谷川聰氏『大作遺跡 大烟遺跡』『北国東白動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

1998年の「第4節まとめ」において、調査部に施文された付加条繩文の仕分けを行っている。

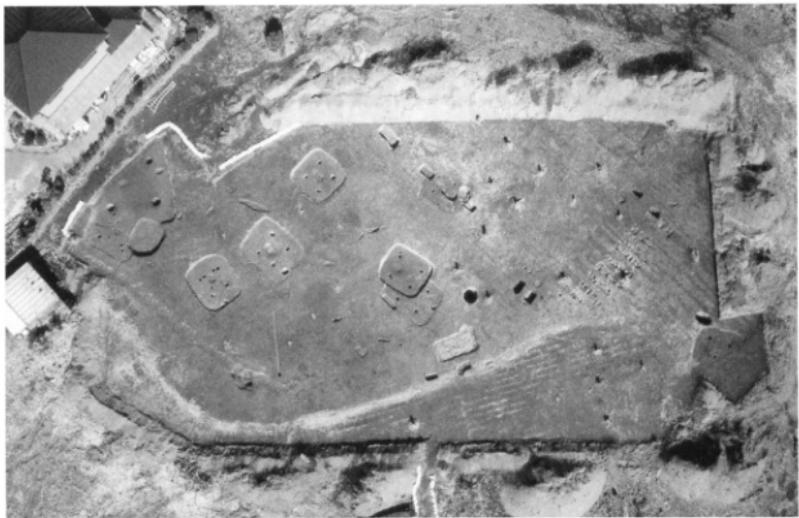


第30図 住居形態・出土遺物の変遷概念図

## 【参考・引用文献】

- 赤塚次郎編 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990年
- 飯島一生 「矢倉遺跡 後口原遺跡」  
『北関東自動車道（友部～水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書II』  
財團法人茨城県教育財団文化財調査報告第135集 1998年
- 飯島一生 「「王台式土器の相違を考える－矢倉遺跡と大畠遺跡の観察から」  
『研究ノート8号』 財團法人茨城県教育財団 1999年
- 飯島一生 「「王台式期における異系統上器文化圏との交流」  
『領域の研究－阿久津洋先生還暦記念論集－』 阿久津洋先生還暦記念事業委員会 2003年
- 茨城県考古学協会 『茨城県における弥生時代研究の到達点』
- 十王台式上器制定60周年記念シンポジウム 1999年
- 海老沢稔 「茨城県における弥生後期の上器編年」  
『東日本弥生時代後期の土器編年』 第9回東日本埋蔵文化財研究会  
東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 2000年
- 海老沢稔 「上稻吉式土器概説－霞ヶ浦沿岸の弥生後期後半の上器群」  
『霞ヶ浦沿岸の弥生文化 土器からみた弥生社会』  
霞ヶ浦町郷土資料館 21回特別展 1998年
- 川又清明 「涸沼前川流域における弥生時代後期の遺跡分布状況」  
『研究ノート9号』 財團法人茨城県教育財団 2000年
- 近藤恒重 「大戸下郷遺跡－主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」  
財團法人茨城県教育財団文化財調査報告第216集 2004年
- 長谷川聰 「大作遺跡 大畠遺跡」 『北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書II』  
財團法人茨城県教育財団文化財調査報告第136集 1998年
- 早川泉 他 『三本松遺跡』 友部町三本松遺跡発掘調査会・大成エンジニアリング㈱ 2003年
- 藤田典夫 「棚木県における弥生後期の土器編年」 『東日本弥生時代後期の上器編年』  
第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本埋蔵文化財研究会福島実行委員会
- 弥生時代研究班 「茨城県後期弥生土器編年の検討（III）十王台式土器について」  
『研究ノート3号』 財團法人茨城県教育財団 1993年
- 吉田寿 他 『小原遺跡』 友部町小原遺跡発掘調査会・大成エンジニアリング㈱ 2005年
- 綿引英樹・松本直人 「大戸下郷遺跡2－主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」  
財團法人茨城県教育財団文化財調査報告第257集 2006年
- 綿引秀樹 「弥生時代後期後半における文化の交差点「大戸下郷遺跡」－大戸下郷遺跡の弥生土器の山上例から」  
『考古学の深層－瓦吹堂先生還暦記念論文集』 瓦吹堂先生還暦記念論文集刊行会 2007年

# 写 真 図 版



調査区 全景 1(上・北)



調査区 全景 2(上・北)

写真図版 2



1号住居 全景（南東から）



1号住居 遺物出土状況（東から）



1号住居 炉近景（南東から）



1号住居 炉断面（南西から）



2号住居 全景（西から）



2号住居 遺物出土状況（南から）



2号住居 遺物出土状況（南から）



2号住居 炉近景（西から）



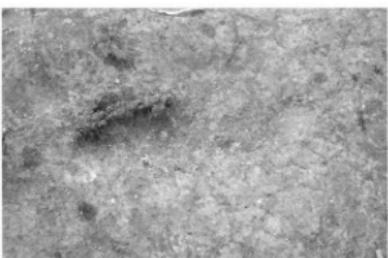
3号住居 全景（南東から）



3号住居 炉近景（南西から）



4号住居 全景（南東から）



4号住居 炉近景（北東から）



5号住居 全景（南西から）



5号住居 遺物出土状況（東から）



5号住居 遺物出土状況（東から）

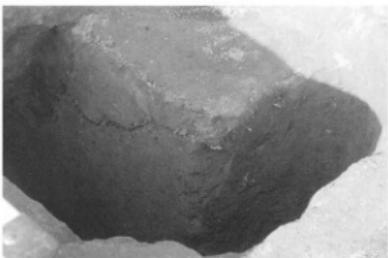


5号住居 炉近景（北東から）

写真図版 4



6号住居 全景・遺物出土状況（南東から）



6号住居 Pit-4 断面（南西から）



7号住居 全景（南東から）



7号住居 炉全景（北東から）



8号住居 炉近景（南東から）



9号住居 遺物出土状況（南東から）



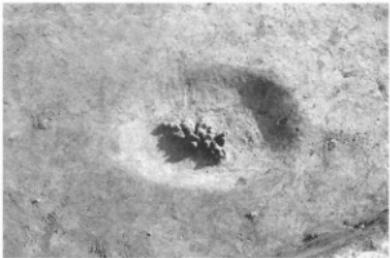
9号住居 遺物出土状況（南西から）



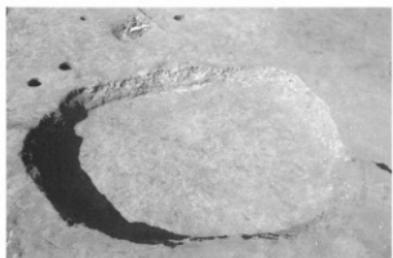
9号住居 炉近景（北東から）



10号住居 全景（南東から）



10号住居 炉近景（北西から）



1号竖穴 全景（南東から）



1号竖穴 遺物出土状況（南東から）



1号竖穴 遺物出土状況（南西から）



1号竖穴 遺物出土状況（西から）



1・10号住居・1号竖穴 全景（南東から）

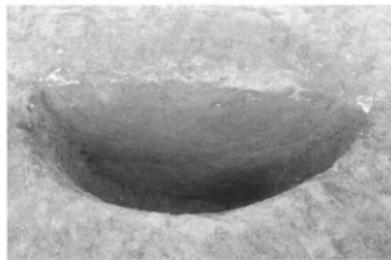


1号溝 全景（南から）

写真図版 6



1号土坑 全景（南から）



1号土坑 土層断面（南から）



2・5・6号土坑 全景（南東から）



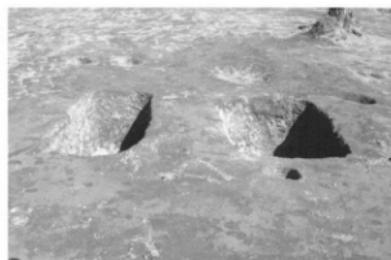
3号土坑 全景（南東から）



3号土坑 土層断面（南東から）



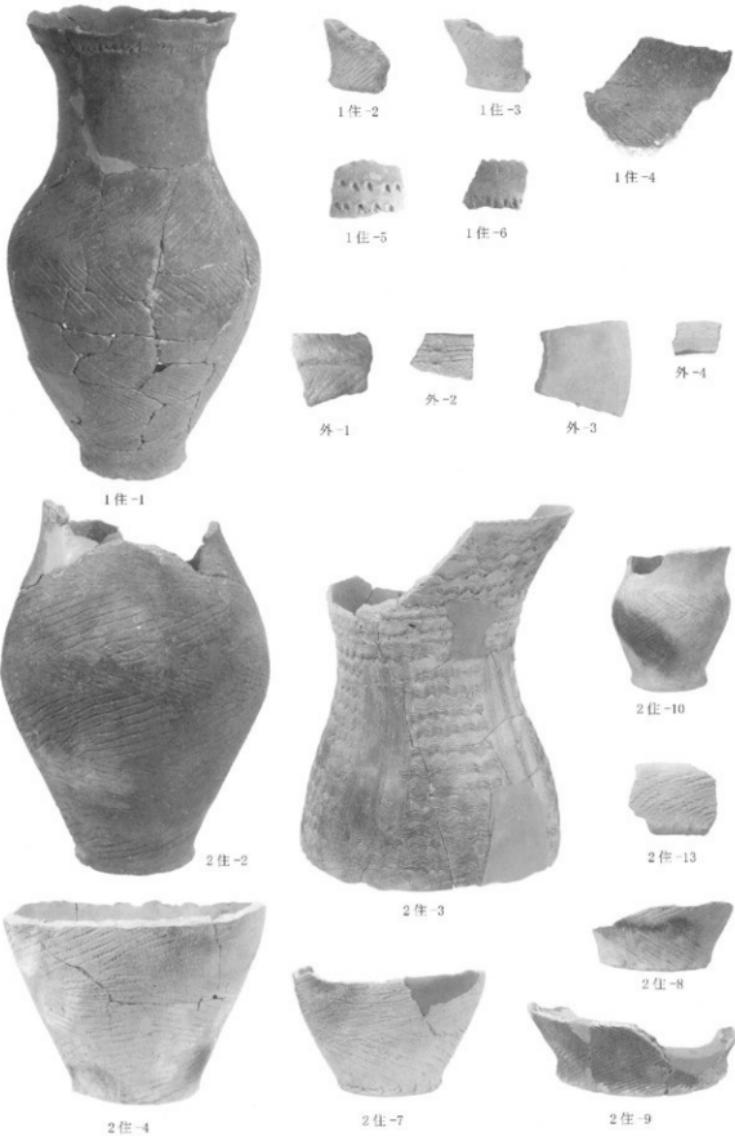
6・7・8号土坑 全景（南東から）



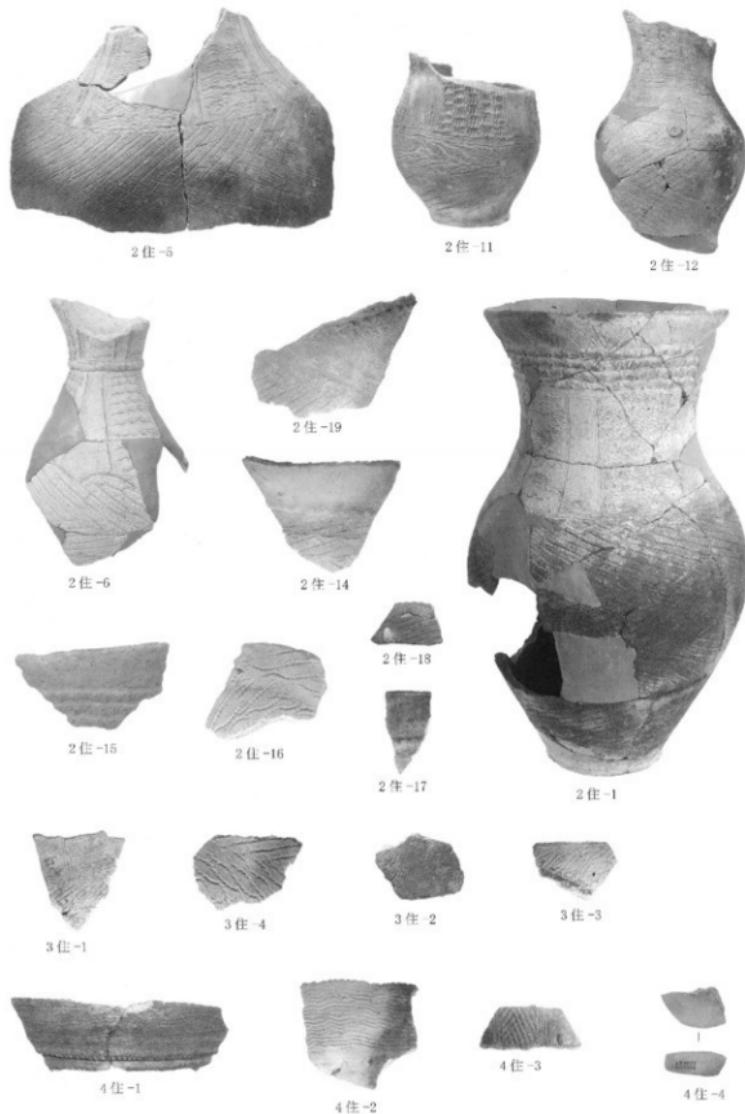
10・11号土坑 全景（西から）

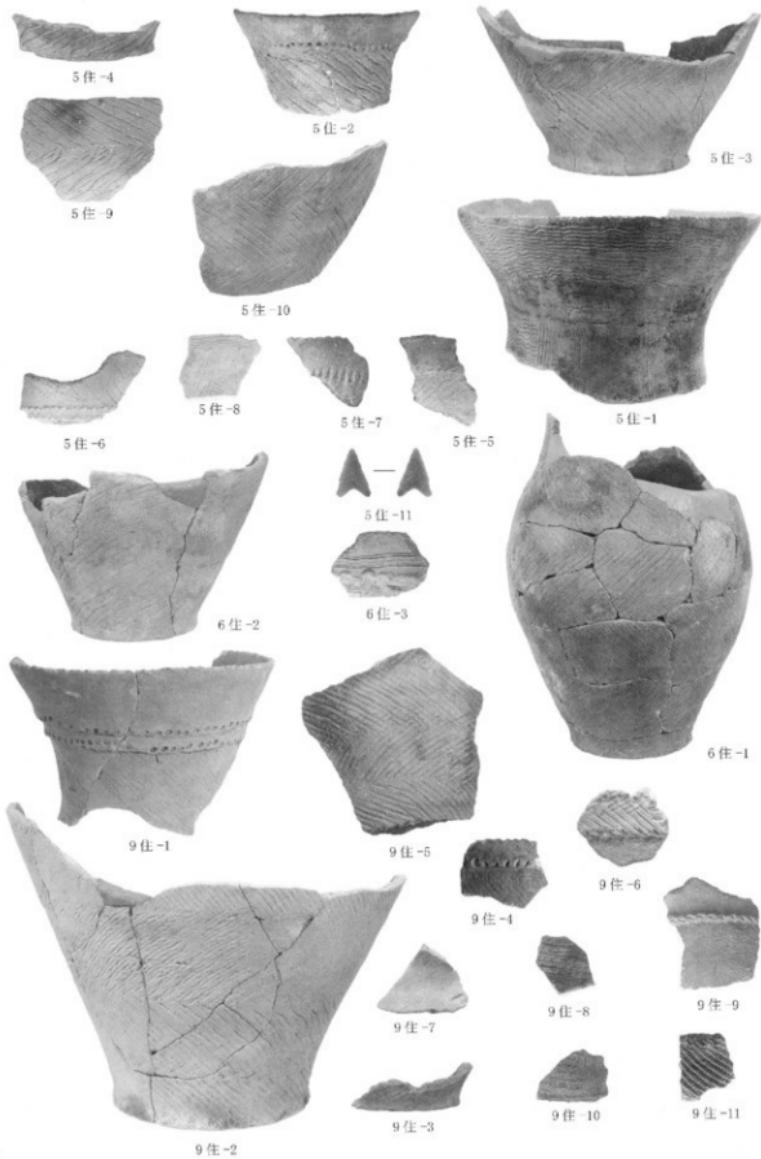


12・13号土坑 全景（東から）

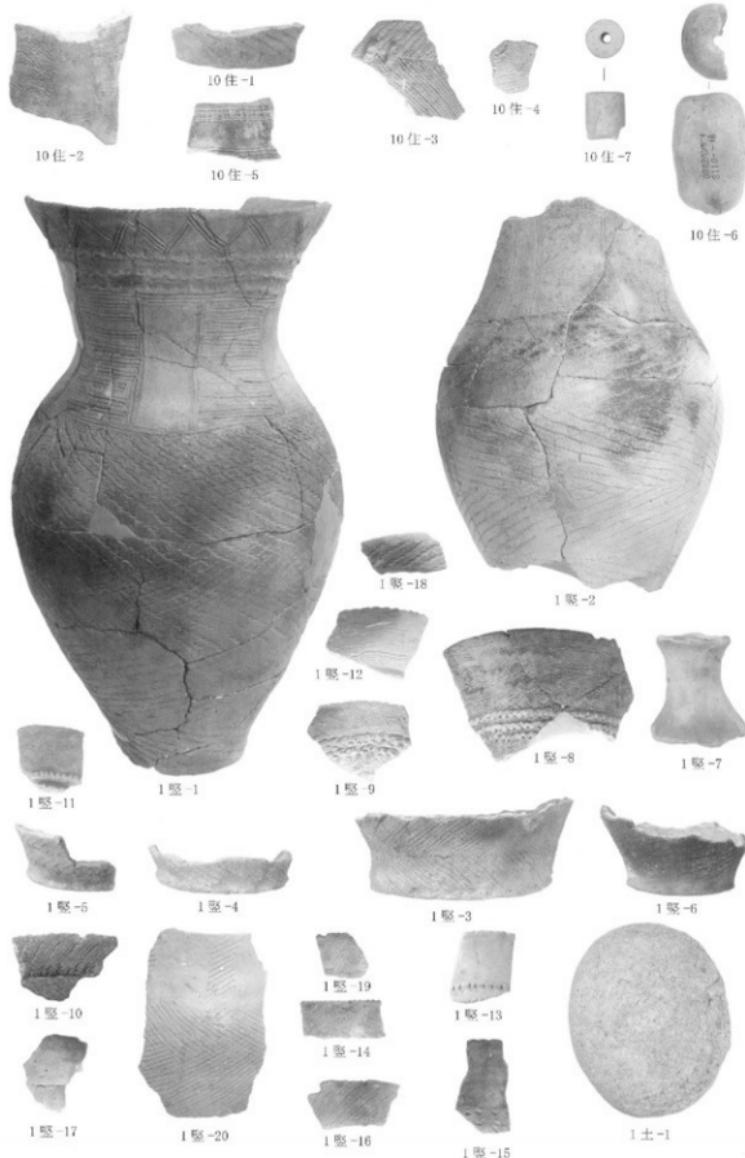


写真図版 8





写真図版 10



## 報告書抄録

ふりがな	はんがい いせき							
書名	塙谷遺跡							
副書名	県営畠地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	笠間市教育委員会・高野 浩之							
編集・発行機関	笠間市教育委員会／〒 309-0294 津城県笠間市石井 717							
	電話：0296-77-1101							
	勝地城文化財コンサルタント／〒 286-0201 千葉県富里市日吉台 1-23-12							
	電話：0476-93-0770							
発行年月日	2008年11月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	調査期間	調査面積	
塙谷遺跡	茨城県笠間市小原 468外	08321	089	36°	140°	2008.02.04	1,535 m <sup>2</sup>	県営畠地帯
				22'	19'	~	2008.03.01	総合整備事業
03"	57"							
所収遺跡名	種別	土な時代	土な遺構	主な遺物			特記事項	
塙谷遺跡	狩獵場	縄文時代	陥し穴 1基	石器（石鏃・敲き石）				
	集落跡	弥生時代	住居跡 10軒 竪穴遺構 1基	弥生上器（広口壺・ミニチュア） 石製品（管状） 土製品（紡錘車・環状土錐）				
	その他	時期不明	土坑 13基 溝 1条	鍍賀（1錢）				
要 約	本遺跡は、瀬沼前川の左岸に位置する丘陵地の先端部にあり、弥生時代の集落が形成されている。確認された遺構は、弥生時代後期後半の住居跡 10 軒、竪穴状遺構 1 基が主体となり、その他に縄文時代の陥し穴 1 基、時期不明の土坑 13 基、溝 1 条となっている。集落は、各住居から出土した上器より、ト王台 1a 式並行期からト王台 2a 式段階までの時期に當まれたものと考えられる。出土遺物の中には異系統の上器も含まれていることから、瀬沼前川中流域における弥生集落の位置づけが注目される。							

### 資料の取り扱いについて

項目	内 容
水洗い	<ul style="list-style-type: none"> <li>全て行った。</li> </ul>
注記	<ul style="list-style-type: none"> <li>次の略号にしたがって遺構番号、出土位置の順で注記した。</li> </ul> <p>遺跡番号 調査年月⇒0802 塙谷遺跡→ハンガイ 遺構⇒SI: 住居跡 等 例) 0802 ハンガイ SI-01 尚、注記不可能な碎片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。</p>
接合・復元	<ul style="list-style-type: none"> <li>接合は接着剤を用い出来る限り行い、復元は全ての遺物に対して行った。</li> </ul>
実測	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺物実測図は、報告書掲載分についてのみ作成した。</li> </ul>
台帳	<ul style="list-style-type: none"> <li>図面台帳、遺物台帳、写真台帳があり、それぞれの資料が検索可能であるように作成した。</li> </ul>
出土遺物収納状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺物は、報告書使用と未使用に分けて収納箱に收め、収納箱には収納内容を記載してある。</li> </ul>
資料の保管場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>笠間市教育委員会</li> </ul>

茨城県笠間市  
塙谷遺跡

印刷 平成20年11月20日

発行 平成20年11月25日

編集 株式会社 地域文化財コンサルタント  
〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12  
電話 0476-93-0770

発行 笠間市教育委員会  
株式会社 地域文化財コンサルタント

印刷 株式会社 ライフ  
〒286-0134 千葉県成田市東和田595  
電話 0476-24-1561

